
永遠のラブストーリー～妊婦日記編～

余田史子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

永遠のラブストーリー〜妊婦日記編〜

【Nコード】

N2342V

【作者名】

余田史子

【あらすじ】

永遠のラブストーリー〜新婚編〜の続きですが、あまり内容にストーリー性はありません。ただ、妊婦の桃子のその後の模様を描きたかったので、書きました。のほほんとしていて、ラブラブな妊婦日記を、よかったらお楽しみください。

11月〇日　まだまだ安定期？（前書き）

桃子と聖の、その後を書きます。妊婦時代のラブラブ、ほのぼの生活の日記のような感じなので、あまりストーリー性はありませんが、よかったらお付き合ってください。

11月〇日 まだまだ安定期？

11月のとある朝、行ってきましたと玄関を出ようとしたら、聖君が玄関にやってきて、

「桃子ちゃん、駅まで一緒に行こう」と言い出した。

「え？ 大学は？」

「今、携帯で調べたら休講だって」

「いきなりその日、休講になったりするの？」

「なるよ。教授の都合でいくらでも」

そうなんだ。大学ってそんななの？

玄関を開けた。少し肌寒いくらいの空気だ。

聖君と朝、こうやって腕を組んで駅まで行くの、どれくらいぶりかな。ちよつと嬉しい。

「公園の銀杏の木、すっかり黄色くなったね」

「うん、今が1番綺麗かも」

「どっか、紅葉見に行きたいね」

「ドライブ？」

「あ、いいね。今度の土曜に行こうか」

「デート？」

「うん」

「嬉しい！」

もう妊娠6か月になって、制服のスカートもきつくなり、ジャンパースカートを履いている。それに聖君がちゃんと、妊婦だってわかるよう、お腹に赤ちゃんがいますって書かれてあるバッジを、学

生かばんにつけてくれた。

ジャンパースカートの上に、ボレロは着れないので、紺のカーデイガンをはおったり、寒いと薄手のコートを着ている。

でも、カバンは学生かばん。だけど、カバンには妊婦のバッジ。周りからは、ちょっと驚きの目で見られることもあるし、好奇の目で見てくることもある。

「あら、まあ、今日は旦那さんが一緒なのね」

後ろから声をかけられた。聖君と振り向き、私はちょっとお辞儀をした。

「じゃ、駅までは旦那さんが守ってくれるから一安心ね」

おばさんがそう言って、にこにこしながら私たちを抜いて歩いて行った。

「なんか、あのおばさん、見覚えあるけど」

聖君が言った。

「覚えてた？前によく、ぐちぐち言ってたおばさんだよ」

「え？」

「朝から腕なんか組んどとか、最近の若いのは〜とか、大声で私たちを見て言ってたでしょ？」

「ああ。思い出した。嫌味をいつも言ってたおばさん。あれ？なんか今日は、やけににこやかじゃなかった？」

「妊婦のバッジをつけたらね、あなた妊婦さんだったの？って声をかけられて、ちょうどその日、電車が人身事故で遅くなって、すごい人が駅にあふれてて、あのおばさん、周りの人が私にぶつかってきたりしないように、守ってくれたんだよね」

「え？そんな時あったの？なんだよ、なんで桃子ちゃん俺に電話し

ないの。車で送って行つたのに！」

「あ、それだったら大丈夫。小百合ちゃんがうちの車に乗っていつて、メールをくれて、乗せてもらえたから」

「…そうだったんだ」

あれ？聖君、口とがらせたけど、もしやいじけた？

「それに、聖君、多分車で出たあとだと思うよ？」

「途中で引き返してでも、桃子ちゃんを迎えに行つた！」

あ、いじけたんじゃないくて、すねたのか。

「それで、あのおばさんと仲良しになったの。毎朝会うと、駅まで一緒にいてくれて、守ってくれるんだよね」

「守るって何から？」

「たまに駅まで走ってくるおっさんとか、学生とか、追突してくることあるから。おばさん、身をていして守ってくれたり、たまにこの子は妊婦なんだから、気をつけなさいよって、大声で怒ってくれたり」

「…ありがたいけど、大声でっていうのはどう？」

聖君が苦笑いをした。

「私もはじめ、恥ずかしかったの。でもそれから、周りの人がぶつからないよう注意してくれるようになったんだよ」

「え？そうなの？」

「うん。たいていが同じ人ばかりじゃない？朝って。私が妊婦だつてこと、みんなもうわかってるから」

「なんか言ってくるやつはいない？」

「陰でこそこそ言ってる人はたまにいる」

「どんなこと？」

「高校生で妊婦なの？って、感じのこと」

「どうしてんの？桃子ちゃんは」

「無視してる」

「…たくましいね」

「え？」

「桃子ちゃん、ほんとたくましくなったよね」

「そりゃあ、そのくらいでめげてたら、風のこと守れないもん」

「…凛々しいな〜」。男らしいよ、桃子ちゃん」

「それ、褒め言葉？」

「もちろん」

「…」

そうかな。

駅に着くと菜摘がすでにいて、

「あれ？兄貴、大学さぼり？」

と聞いてきた。

「休講なの！」

「それで、桃子のこと送ってきたの？なんでそんなに、いまだにラブなわけ〜？熱いね〜」

「うっせえよ。お前こそ、葉一と今度温泉行くって」

「葉君のお母さんも一緒にだよ！」

菜摘は聖君の言葉に、顔をあからめながらそう言い返した。

「よかったじゃん」

「う、そうかな。今から緊張してるんだけど」

確かに。菜摘、すでに顔が引きつってる。

「あ、じゃあ何？お母さんと菜摘が同室？」

「うん」

「葉一は一人？」

「多分」

「じゃ、エッチなしの旅行？うわ。葉一かわいいぞ！」

バチン！！

菜摘が聖君の背中を思い切りたたいた。

「いってゝゝゝ！」

聖君が背中を押さえ、前かがみになった。

「兄貴！その発言はセクハラだよ！」

「なんだよ。兄妹なんだから、セクハラでもなんでもないだろう？」

「兄妹でも、デリカシーってものがあるでしょ！そういうこと平気で言わないでよっ。もう信じられない。こんなこと平気で言うような兄貴で、桃子も幻滅したでしょ？」

「……」

私は黙り込んだ。なにしろ、聖君がスケベ親父だってことは、前から知ってるし。

「兄貴、そんなことばかり言って、桃子に嫌われて捨てられても知らないからね！桃子、行こう」

そう捨て台詞を残し、菜摘は私の腕をつかみ、改札を抜けた。私は振り返って聖君を見た。あ、顔が青ざめてる。

「送ってくれてありがとう」

私がそう言って笑って手を振ると、聖君はほっとした顔をして、手を振りかえた。

菜摘は聖君に何も言わず、また私に、

「行こう、桃子」

とふくれっつらをして、エスカレーターに乗った。

「ほんと、信じられない。桃子も幻滅したでしょ？」

「：葉君って、ああいうエッチな発言することないの？」

「ないよ。言うわけないじゃない」

「まったく？」

「兄貴言うの？」

「う、うん。けっこうスケベ親父だよ」

「げくくく。そうなの？ああく。なんか兄貴のイメージが今、がらがらと音を立てて崩れていく」

私と菜摘は電車のドアが開いたので、乗り込んでシートに座った。

「菜摘にとって、聖君ってどんなイメージなの？」

気になり聞いてみた。

「一見クール。でもそうじゃないってのはもうわかった。けっこうあほなガキっぽいところがあるのも、知ってた。だけど、その辺の男とは違って、あまりああいうエッチなこと言うとは思っててもみなかった」

「そうなの？」

「桃子は？桃子だっと思っててもみなかったでしょ？幻滅してない？兄貴のこと」

「全然」

「全然？」

「うん」

「：御見それしました」

菜摘がそう言って、頭を下げた。

いや、頭を下げられても。それに私、そんなエッチなことを言う聖君も、かわいいって思うことあるし。

って、こんなだから、聖君に、桃子ちゃん変態だって言われちゃうのか。

それにしても、駅でたまにこそそこそと何かこつちを向いて話したり、電車の中でもちらちらと見られることはあるけど、学校ではみんな、あったかく接してくれてありがたいよなあ。

先生方もだけど、事務の人たちや、PTAの役員さんも、会うと「お腹の赤ちゃん元気？」って声をかけてくれる。

私だけじゃなく、小百合ちゃんもみんなからあったかく見守られていて、よく2人で、本当にありがたいよねって話してるんだ。

特に、マスコミが騒いだりすることもないし、親御さんが文句を言いに来ることもないし。

「おばあさまが言ってた。PTA役員さんがかなり、頑張ってるんだって」

「え？ どういうこと？」

「やっぱり、いろんな抗議の電話もあったし、じかに学校に来る親もいたみたいだよ。でも、先生方だけじゃなく、PTA役員が直接話をしにいつてくれたりしてるんだって」

「そうだったの？」

お昼を食べてる時、小百合ちゃんがそう教えてくれた。

「すごいね。綿貫会長、さすがだよね」

菜摘がそう言うのと、苗ちゃんが、

「椿のお母さんも頑張ってるんじゃない？」
と椿ちゃんに聞いた。

「うん。お母さん、小百合ちゃんも桃子ちゃんも、絶対に元気な赤ちゃんを産んでほしいし、そのためならひと肌でもふた肌でも脱ぐとか言っちゃって、やたら張り切ってるの」

「へへへ」

ほんと、人って変わるもんだな。

「すごい味方をつけたんだね」

菜摘がそう言うのと、

「私たちだってみんなが、味方だもんね」
と果歩ちゃんがそう言ってくれた。

「ありがとう」

小百合ちゃんが涙ぐみながら言った。私もじゅんってして、鼻水が出そうになり、ズズってすすった。

「泣いてるの？」

菜摘が聞いてきた。

「う、だって」

私が言葉を詰まらせると、

「あはは。こうだから、みんな守りたくなるんだよね、2人のことをさ」

と菜摘が笑った。

あ、この笑い方、聖君に似てる。最近よく、菜摘と聖君がかぶって見えるんだ。似てるんだよね。やっぱり、兄妹だよね。

これ、前なら菜摘に言うのと、喜んでたけど、今日はどうかかな。聖君にかなり幻滅してたみたいだし。今日は言わないでおこうかな。

その日、聖君は早めに家に帰ってきた。

「おかえり〜。早かったね！」

私が喜びながら玄関まで出迎えると、

「だって、桃子ちゃんに早くに会いたくて」
と聖君は抱きしめてきた。

「ぎゅ〜〜〜〜」

しばらく玄関で抱きしめあい、それから揃ってリビングに行った。この二人のハグを、最近は母も邪魔しなくなった。聖君が帰ってきた時、出迎えに行くのは私だけになり、みんなダイニングにいたり、キッチンにいたりして、部屋に入ってきた聖君に、

「おかえりなさい」

と言っている。

「聖君、お風呂入るでしょ？」

「はい」

母に聞かれ、聖君はうなづいた。

「あ、もう洗面所に聖君の着替え、用意してあるから」

私がそう言うのと、

「いつもサンキュー」

と言って、聖君は私とお風呂場に行った。

お腹が大きくなっても、一緒にお風呂に入れないものか…。と、考えた聖君は、時間差でお風呂に入ることを編み出した。まず、一緒に入って、聖君が私の体や髪を洗ってくれる。そして私がバスタブに入ってる間、いつも豪快にさっさと洗っているのを、ゆっくりめに聖君は体と髪を洗う。

それから私がバスタブを出ると、聖君がバスタブに入る。そして私は、先にお風呂から出る。

私が体を拭き、着替えをして、髪をその場で乾かしている間に、聖君はお風呂から出てくる。出てきた聖君に私はいつも、クラツとしながら、背中とか拭いてあげちゃったりしている。

今日の聖君も、かっこいい！と心の中で騒ぎながら。

「なんかさあ、俺も桃子ちゃんの体拭いてあげたいのに、それができなくなったのが残念で」

「でも、体は今も洗ってくれてるよね？」

「そうなんだけど、体拭くのもしてあげたいのにな」

…なんで？

「あゝあ」

ため息までついてるし。

「拭いてもらうのはあまり好きじゃないの？」

「え？まさか。嬉しいよ。でも桃子ちゃん、背中しか拭いてくれないじゃん」

「え？」

「まあ、かがむのは大変だから足はいいけど、せめて胸とか、腕とか、拭いてくれても」

したいけど、恥ずかしかったからしなかったのに。

「でもあれか。お腹の大きな桃子ちゃんに、そんなこと頼むのも悪いか」

「だ、大丈夫だけど」

「まじで？」

あ、聖君の目、輝いた。

「じゃあ、はい」

聖君がこつちをぐるって向いた。ひゃあ。聖君のたくましい胸、じかに見ちゃった。いや、見慣れてはいるけど、でもドキッてしちゃったよ。

「聖君、また体引き締まった？」

「わかる？」

「筋トレ？」

「うん。父さんがまた新たに買ってきちゃって」
「筋トレグッズ？」

「そう。お前も赤ちゃんの世話、大変なんだから、今のうちに鍛えておけて。そんなに大変なの？って感じじゃない？」

「だよな」

「…引き締まった体、どう？」

「え?!」

いきなり聖君に聞かれ、私は真っ赤になった。

「あ、真っ赤だ」

「も、もう……。いきなり変なこと聞いてこないで」

「なんで？ただ、どうかなって思ってただけなのに」

「…どうって、えっと。か、かっこいいなって思ったけど」

「そんだけ？」

「…」

ドキッてしちゃったとか、うつとりとさつきも、体洗ってる姿見てたとか、そんなこと言えないよ。

ムギユ。あれ？いきなり聖君、抱きしめてきた。

「明日、学校休みだよな？」

「うん、土曜日だもん」

「じゃ、ちょっと夜更かししても平気だよな？」

「え？」

「まだまだ、安定期だよな？」

「う、うん」

「部屋行って、いちゃつこうね」

また。そんなこと言って。

「あのね、そういうこと言ってるって、もし菜摘が知ったら、もっと幻滅されちゃうよ？」

「いいよ。菜摘に幻滅されても。っていうか、こんな会話してるの、ばれるわけないし、大丈夫だって」

「…」

「ただ…」

「ただ？あれ、聖君黙り込んだ。」

「なあに？聖君」

「桃子ちゃんに幻滅されるのは、俺、かなり痛手かも」

「…私が、幻滅？」

「うん」

「聖君がスケベ親父で？」

「う、うん」

「そんなの前からわかってたし…。今さらだけど？」

「だ、だよね」

あれ？でも、声沈んでない？

「聖君がスケベ親父でも、エッチでも、私が幻滅することなんて、地球がひっくり返ってもありえないから、安心して？」

「……」

あれ？まだ黙ってる？

「むぎゅ～～～～」

あ、むぎゅ～～の声が浮かれてる。聖君。

「もう、桃子ちゅわんってば、ほんと、俺に惚れすぎ～～」

私の髪に頬づりをする聖君は、さっと私から離れ、

「急いで着るから、部屋に行っていちゃつこうね。ああ、本当はこのまま裸ですっとなで行きたいくらいだけど」

とそんなことを言った。

「リビングにお父さんもお母さんもいると思うから、それはやめて」
「うん」

聖君はお尻や足がまだ濡れてるのにもかかわらず、パンツとスエットを履いて、長袖Tシャツをかぶりながら、洗面所を出た。そして、リビングにいる母と父に、

「お先でした！」

とわけのわからない挨拶をして、私の手を取って2階に上がった。

部屋に入ると、またいきなり豹変。

「桃子ちゅわ~~~~ん」

と言いながら抱きついてくる。

「日記は？」

「あとで」

「髪濡れてるよ」

「そうだった」

聖君はドライヤーで、わしゃわしゃと髪を乾かし、

「あ、桃子ちゃんも半渴きだったね」

と私の髪は丁寧な乾かしてくれた。

そして、後ろから抱きしめてきて、

「桃子ちゃん。今日もすげえ可愛い」

と耳元でささやいた。

ボボ！もう何万回も言われてるだろうけど、いまだに顔が赤くなってしまう。

聖君はドライヤーとブラシを床に置くと、私をベッドに寝かせた。
「お腹張ってきたりしたら言っってね」

そう言うと、優しくキスをしてくる。

そう。相変わらず聖君は、優しい。キスも優しいし、触れる手もすごく優しい。そして私はそのたびに、とろけそうになっている。

「聖君」

「ん？」

「大好き」

「うん、俺も愛してるよ」

夜更かしOKだよねって言った日は、決まって聖君は時間をかけて愛してくれる。でも、お腹が大きくなってきてるので、時々、お腹張ってない？大丈夫？と聞いてくれる。

それに、私の上には絶対に乗らないし、体重をお腹にかけるようなことは絶対にしない。抱きしめるのも、そっと優しくだ。

そんな優しさが伝わってきて、それだけでも私は、溶けそうになる。ああ、聖君、優しい。ああ、聖君が愛しい。そんな思いでいっぱいになり、ものすごく幸せを感じる。

聖君は腕枕をしてくれた。私は横を向き、聖君に抱き着いた。

「安定期ってところで、いつまで？」

聖君は天井を見たまま、そう聞いてきた。

「さあ？」

私は、聖君の首にキスをしながら答えた。

「あ、桃子ちゃん、そこくすぐったい」

そんなことを言われてもやめないで、キスをした。

「：桃子ちゃん、くすぐったいって言うの聞いてた？」

「うん」

仕方なく、聖君の首筋から唇を離した。

「で、安定期っていつまで？まさか、臨月まで平気ってことはないよね」

「…わかんない」

「まさかな。先生に聞けないしな」

私は今度、聖君の耳たぶにキスをした。

「も、桃子ちゃん、耳、弱いんだってば」

聖君がそう言って、くすぐったいって顔をした。う。その顔がかわいくて、つい耳にキスをしてしまう。

「桃子ちゃんさ、絶対にあれだよ」

「え？」

「…」

「何？」

「俺のこと、襲ってくるようになったよね」

「襲ってない」

「今、襲ってるって」

「これは違うもん。ただ、キスしてるだけだもん」

「俺にキスしたいの？」

「う、うん」

「…」

聖君が、流し目を使って私を見た。

「なに？」

「もう、エッチなんだから」

「え？」

「でも、エッチの桃子ちゃんも俺、愛してるからね！いくらエッチになっても幻滅しないから安心して」

そう言つて、聖君はチュツてキスをした。そして、

「地球がひっくり返るくらい、どんなに桃子ちゃんがエッチになつても、幻滅しないからね」

とそんなことを言つた。

「そそそそ、そんなにエッチにならないも〜ん」

「あはははは！」

もう、思い切り笑ってるし。だから、言動と笑顔が一致してないんだつてば。なんでそんなにいつも、爽やかに笑うのよ。

つて、そんなこんなで、今日も甘く、とろけるように夜はふけて行くのであった。まる。

12月〇日 父親学級

6か月に入ってから、私は小百合ちゃんと区でやっている母親学級に参加し始めた。

そして今月は、父親も一緒に参加して、赤ちゃんの沐浴を教わる回だ。

「いよいよ明日だね」

前日、小百合ちゃんとそんな話をしていた。

「聖君は大学どうするの？」

「午後から行くって。輝樹さんは？」

「午後から会社に行くって言ってた」

「そっか」。私たちはしっかりと明日、学校休んじやうのにね」
「うん」

私たちは時々、2人だけで妊婦ならではの話をしていた。他のみんなにはわからないことだし、なんとなく二人だけで話したい時があり、そんな時はたいてい、保健室にやってきてしまう。

養護の先生も子供がいて、妊婦の体験も出産の体験もあるので、いろんな質問もしやすいし、他の友達は保健室に行って、先生に話を聞いてもらいに行くと言うと、みんな私たち二人だけを、保健室に行かせてくれるので助かっている。

「聖君は、父親学級に出るの、抵抗ないの？」

「まったく。ずっと出たがってたから、明日をすんごい楽しみにしてるよ。ばっちりお風呂に入れるよう、しっかりと覚えて帰るからねって、張り切ってるもん」

「いいなあ」

「え？輝樹さんはそうじゃないの？」

「ちよっと嫌がってるの。でも私、聖君だって出るんだよって言うて、無理強いしちゃった」

「そうなんだ」

「聖君がいなかったら、絶対に出ないな、輝樹さん」

「そんなもんよ、普通の男性は」

話を聞いていた養護の先生が、口をはさんだ。

「榎本さんの旦那さんが、めずらしいのよ。だから、筑紫さん、そんなに落ち込むことないわよ」

「はい」

うーん。めずらしいと言われるのも、喜んでいいものかどうか。

あ、そうそう。筑紫さんっていうのは、結婚して小百合ちゃんの苗字が変わったんだ。筑紫小百合。やっぱりちよっと、女優さんみたいな名前だよね。

「あ、そういえば、孫学級って今ありますよね。孫が生まれたら、世話ができるようになって、おじいさんやおばあさんが参加するっていうのが」

小百合ちゃんが先生に聞いた。

「あるわよ。でも、区でそういうのもしてるのかしら。病院でしてるのかしら」

「調べたらわかりますか？」

「今、ネットで調べてみる？なんで？お母さんが参加したいって？」

「いえ、おばあさんが」

「え？！理事長が？」

私と先生が同時に驚いてそう口走った。

「はい。なんだか、ひ孫の世話をするんだって、今から張り切っち

やってて」

「あの理事長が」

養護の先生が、口をあんどぐりと開けたまま、呆けてしまった。

「うちの母親も、出たいって言ってたし、聖君のご両親も出たいって言ってました。特に、聖君のお父さんが」

「お孫さんの面倒を見たいって？」

「はい。お風呂も入れるって言い出して、聖君と喧嘩してました」「え？ 喧嘩？」

小百合ちゃんと先生が、同時に聞き返した。

「聖君、絶対に風呂の風呂は父さんにはさせないって言って、お父さんは絶対に俺も入れるって言って、2人とも一步も譲らないって感じで…」

「そうなの？ おほほ…。大変ねえ、今から」

先生は笑いながらそう言った。

「でも、それだけ赤ちゃんが生まれるのを、楽しみにしてくれてるんですよね」

小百合ちゃんがそう言うと、

「そりゃそうよ。私も楽しみだし、この高校の先生方もみんな、楽しみにしてるのよ？ 生まれたらぜひ、赤ちゃん連れて遊びに来てよ」と先生が言ってくれた。

そして、保健室からの帰り道、また私と小百合ちゃんは、ありがたいよねって言い合っていたんだ。

で、今日は、父親学級当日。昨日の夜から聖君は、めちゃくちゃ張り切っていた。朝も、7時前に目覚め、

「俺、顔洗ってくる！」

とさっさと着替えて、一階に行ってしまう、部屋には戻ってこなか

った。

私はのそのそと着替えをして、のそのそと一階に行った。どんどんお腹が大きくなり、動きが鈍くなり、重たくなってきていて、もともとスローな私はますます、スローになっていつている。

「桃子ちゃん、ハムエッグでいい？」

「あ、あれ？聖君がご飯作ってくれるの？」

「うん。お母さん、今日出張エステだって。支度あるみたいだから、俺が朝ごはん作っちゃうよ」

そう言うと、聖君は鼻歌交じりに朝食を作り出した。ああ、思い切りご機嫌だな。

「お父さんは？」

「もう出かけた。朝から遠出するって言ってたよ」

「遠出？」

「日帰りの出張だって。ほんと、大変だよね」

「そうなんだ」

私は洗面所に顔を洗いに行った。そしてダイニングに戻ってくると、すでにハムエッグもトーストも、オレンジジュースやサラダまで、用意されていた。

「じゃ、食べようか！」

「うん。いただきます」

聖君と一緒に、朝ごはんを食べだした。聖君はいつものごとく、美味しそうに食べている。

そして聖君が食べ終わったころ、バタバタとひまわりが降りてきた。

「あ、あれ？お母さんは？」

ひまわりはダイニングテーブルに着いた。ひまわりの席にもすでに、ハムエッグとサラダが置いてあり、聖君はトーストを焼き、オレンジジュースをコップについであげた。

「あ、お兄ちゃんが作ってくれたの？」

「うん」

「わあい！」

ひまわりは嬉しそうに食べた。

「フルーツも食べる？」

聖君は私とひまわりに聞いた。

「ああ、私はいいや。もう時間ないし」

そう言うひまわりは、ハムエッグやトーストをバクバクと食べ、オレンジジュースをグビグビと飲み、

「ごちそうさま」

と言って、さっさと洗面所に行ってしまった。

「桃子ちゃんは？食べる？」

「うん」

聖君はリンゴをむいて、持ってきてくれた。そしてまた、2人のんびりとそれを食べた。

「いってきま〜す」

とその横を、ものすごい勢いでひまわりが走り抜けて行った。

「今日も元気だね、ひまわりちゃん」

聖君、それ、心から言ってる？ちょっと毎回、実は呆れてたりしない？

ま、いいけど。

「じゃあ、お母さんもう行くわよ。戸締り、しっかり頼んだわよ、桃子」

「うん。いってらっしゃい」

母を玄関で見送った。聖君は母の重たい荷物を、母の車まで持って行ってあげていた。

「さ〜て」

聖君は家に入ると、玄関のドアにかぎをかけ、そして私の肩に手を回し、リビングに連れて行った。

「2人つきりだね。思い切り、いちゃつく？」

ブンブン。私は首を横にふった。

「もうそろそろ、保健所に行く準備しなくっちゃ」

「：ちよつとも時間ない？」

「聖君、沐浴の仕方、ばっちり覚えるんでしょ？」

「そうでした」

聖君はそう言うのと、2階に駆け上がり、スタジャンをはおって下に来た。

「じゃ、車、出してきちゃうね」

「うん」

私も部屋に行き、上着を羽織り、それから玄関を出た。聖君はもう駐車場から車を出していて、助手席のドアを開け、私が乗るのを待っている。

そして私が車に乗ると、聖君は運転席に乗り込み、車を発進させた。

「ああ、すげえ楽しみ」

聖君はにこにこしている。私も一緒に行けるのが楽しみだ。きっと、今日来るお父さんの中で、一番若くて、かっこいいんだろうな。

あ、でも、他の妊婦さんが、聖君に惚れたらどうしよう。なんつって。

そして保健所に着き、会議室のようなところに通されると、そこにはもうすでに何組かの夫婦がいた。

「あ、桃子ちゃん」

「小百合ちゃん」

小百合ちゃんのところに、聖君と行くと、小百合ちゃんの横にいた輝樹さんが、あきらかにほっとしたのがわかった。

「ね、また若いご夫婦が来たわよ。あのかっこいい子が旦那さんのよね」

「まだ高校生くらいじゃないの？奥さんのほう」

そんな話が聞こえてきた。

すると小百合ちゃんが私のすぐ横に来て、

「私もここに入ったら、あれこれ言われちゃったの」

と耳元でこそっと話してきた。

「やっぱり、私たち目立っちゃうんだね」

と言いながら私は、周りの妊婦さんを見ると、あ、みんなの視線は聖君にくぎ付けになっていた。

やっぱり。自分の旦那さんもほっておいて、聖君をみんな見てるよ。

そんなのおかまいなしに聖君は、楽しそうに輝樹さんと話をして
いる。

そして、保健婦さんがやってきて、沐浴の指導が始まった。旦那さんの数は7人。みんな順番に、重さが3キロもあるよくできた赤ちゃんのお人形で、沐浴の練習をさせられることになった。

どの旦那さんも、すごく緊張しているようだ。

「うわ、けっこう重いんだ」

と、お人形を抱いて、驚いている人もいる。

輝樹さんの番になった。するといきなり、小百合ちゃんはおもむろにビデオカメラをだし、撮影しだした。

もしや、記念に撮ってるのかな？ と思い、小百合ちゃんに聞いてみると、

「違うの。おばあ様が、絶対にビデオ撮ってきなさいって言うから」と苦笑いしながらそう言った。

理事長が？

ほんと、驚かされるよなあ。

あ、私はそうだ！ 写メを撮ってプリントアウトして、風の日記に貼っちゃおう！

最後が聖君で、ずつとうずうずしていた聖君は、張り切って赤ちゃん人形を抱き、沐浴を始めようとして、ボト…。赤ちゃんをベビ―用のバスタブに落っことしていた。

「あらら」

保健婦さんが、

「本当の赤ちゃんだと、もっと滑りやすいんですよ。本当に注意して、いれてあげてくださいね」

と聖君を注意した。

「はい」

聖君は沈んだ顔でそう返事をした。あ、かなりへこんじゃった？

「じゃ、もう一回最初から、やってみましょう」

保健婦さんにそう言われ、聖君は気を取り直し、もう一回最初から沐浴の練習をし始めた。今度は真剣な顔つきだし、すごく注意しながらやっている。

これだ！ 私は携帯で写真を撮った。聖君は手を止めて、一瞬こっちを見たけど、また赤ちゃん人形のほうを見て、緊張しながら沐浴

させた。

「かっこいいのね、あなたの旦那さんでしょ？」
隣にいた人が、小声で聞いてきた。

「は、はい」

「若いのね。今いくつなの？」

「私は17で、彼は18です」

「ええ？じゃ、まさかまだ、高校生同士？」

「あ、彼は大学生です」

「そうなの。もう籍は入れたの？」

「はい」

「そう〜〜〜」

その人のお腹は、私よりもずっと大きい。

「今何か月？」

「7か月になります」

「じゃ、まだ大変じゃないわね。私は9か月。もう夜寝る時も上を向いて寝れないし、トイレは近くなったし、大変なのよ」

「そうなんですか？」

「この近くに住んでるの？」

「はい」

「また会えるといいわね」

「母親学級は？」

「私は今回が最後なの。産院はどこ？」

「すぐそこの青木産婦人科です」

「あら、一緒だわ。じゃ、検診とかで会えるかもしれないわね」

「はい」

そんな話をしている間に、聖君の沐浴の練習は終わってしまった。
あ、全部見ていたかったな。

パチパチパチ。なぜだか、聖君が終わって、保健婦さんに赤ちゃんの人形を返すと、みんなから拍手が起こった。

保健婦さんの話をそのあと聞いて、父親学級は無事に終わった。

「上手だったわよう。うちの旦那さんよりも」

「若いのに父親学級に来て、えらいのね」

「かっこいいパパになるわね」

そんな言葉を妊婦さんたちは思い思いに聖君に言うと、旦那さんと会議室を出て行った。

「はあ。なんか、緊張した」

聖君がため息をついた。

「ほんとだな。練習でもこんなに緊張するんじゃ、赤ちゃんなんて、実際沐浴させてあげられるのかな」

輝樹さんがそう言うと、

「父さんが、やらなきゃいけないって時が来ると、できちゃうもんだよって言ってましたよ」

と聖君がそう言った。

それから、4人で近くのファミレスに入った。そして、和気あいあいと話をして、別々の車にお互いが乗り込み、お互いの家へと帰って行った。

「疲れたかも…」

家に着くと、聖君はそう言って、私を玄関まで送ってくれて、

「じゃ、このまんま俺、車で大学行っちゃうから」

とまた玄関を出て行ってしまった。

「いってらっしゃい」

私は玄関から手を振った。聖君もニコって笑い、車に乗り込み、行ってしまった。

「なんだ」

2人きりだし、ちょっとリビングでいちゃついてから大学行くのかと思ってたのにな。

寂しいな。

帰ってくるまで、聖君のセーターでも編みながら、おとなしく待つてるとするかな。

そう。風のはいろいろと編めちゃったから、今は聖君のセーターを編んでいる。聖君と一緒に毛糸は買いに行った。聖君が自分で選んだ毛糸だ。なかなか渋い感じのセーターになりそうだ。

「ただいま」

母が帰ってきた。

「おかえりなさい」

リビングから玄関に出迎えに行った。

「どうだった？父親学級は」

「聖君、緊張しながら沐浴の指導を受けてたよ」

「あら、そうなの？」

母は荷物を片づけに行き、それからリビングのソファに座った。

「お茶入れるね」

「ありがとう、桃子」

私は渋めの日本茶を淹れて持って行った。

「は。美味しい」

母がお茶を飲んで、ため息をついた。

「それで、どう？聖君はちゃんと風ちゃん、お風呂に入れてあげら

れそう？」

「うーくん、お母さんのほうがいいかも」

「え？なんで？」

「一回、赤ちゃんの人形落としてたし」

「そんなに緊張してたの？」

「さあ。あれは緊張じゃないと思うけど」

「大丈夫よ。本物の赤ちゃんならもつと、気を付けるから。それに、お母さんだって沐浴の仕方なんて忘れたわよ。だから、あまり頼りにならないわよ」

「そうなの？」

「でも、じじばば学級だってあるんでしょ？あれに参加しておくわよ」

なるほど。世話がしたくてじゃなく、どう世話するかをすっかり忘れちゃってたから受けたかったのか。

うーくん。私は2人も育てた母に、かなり期待していたのにな。こうなったら、聖君のご両親に期待するしかないかな。

「さて、もうちょっとしたら、夕飯の準備しなくちゃね」

「私も手伝うよ」

私は母とあれこれ話しながら、夕飯を作った。

父がめずらしく早くに帰り、3人で夕飯を食べた。父は風呂をお風呂にいたいようで、今日の沐浴のことを、あれこれ私から聞き出そうとしていた。

「でも、実際に練習したのは聖君だし、聖君に聞いたほうがいいよ」と言うと、父はそうかと言って、にんまりとした。

あ、でも。聖君、お風呂にどっちが入れるかですでに、聖君のお

父さんと喧嘩してたし、うちの父までが風呂をお風呂に入れると言い出したら、父とも喧嘩になっちゃうかしら。

と、思ったりもしたが、そんな心配はまったくいらなかった。

聖君が帰ってくると、嬉しそうに父は出迎え、さっそく今日の沐浴の指導はどうだったかと聞いた。

「赤ちゃん、3キロって重いんですね。ちょっと俺、ちゃんと風呂をお風呂に入れられるか心配になっちゃいました」

「わかるよ。僕もそうだった。でも、毎日入れてたら、まったく大丈夫になっちゃうから」

「そうですか？あ、お父さんは桃子ちゃんをお風呂に入れてあげたりしてたんですか？」

「うん。ベビーバスにも入れてあげてたよ」

「じゃ、経験がある分、俺よりも上手でしょうね」

「ははは、どうかな。まあ、入れてみたら思い出すかもしれないなあ」

「じゃ、最初のうちはお父さんに入れてもらおうかな」

え？！

「そうかい？うん。いいよ、引き受けるよ」

ちょ、ちょっと？聖君、風呂は俺が絶対に入れるって、この前聖君のお父さんには言ってたじゃない。父さんには入れさせないって…。

「ああ、なんか、人形だって言うのに、緊張したな。一回落としちゃったし。あれが風呂だったら大変すよね」

「大丈夫だよ。まあ、僕が見本を見せてあげるから、それから風呂を入れるようにしたらどうかな」

「はい。そうします」

「はははは」

ああ、父はものすごく上機嫌になった。それと反対に聖君はうなだれている。

あんなに楽しみにしていた父親学級。そんなにへこんじゃったの？
グニ〜。あ、風がお腹で動いた。まさか、聖君の姿を見て、がっかりしてるのか？いや、逆に慰めたいとか？

わかんないけど、自信满满だった聖君がいきなりしよげちゃったのは、ちよつと私は驚きだった。…まる。

12月24日 聖君の誕生日 その1

今日は聖君が生まれた日だ。明日はクリスマス会を例年のように、れいんどろっぷすでやる。そして今日は、聖君とは二人だけで過ごす…。

正確には2人と凧と。だから3人かな。

凧は本当によくお腹の中で動く。聖君も私のお腹によく手を当てて、話しかけている。

「桃子ちゃん、用意できた？」

「うん」

今夜、聖君は、お店に出ないでもいいんだって。お父さんが代わりに出てくれるらしい。だから、今日は2人でデートをすることにしました。

デートの場所はみなとみらい。車を聖君が出してくれる。私は何もプレゼントはいらない。聖君と2人だけで過ごしたいと言ったら、なんと聖君はみなとみらいのホテルを予約してくれたのだ。

いや、実はかなり前から聖君は予約していた。新婚旅行にまだ行けていないから、生まれてしばらくは旅行もできないし、近場でもいいから一泊しようって、聖君がホテルを予約してあることを明かしてくれたのは、クリスマスが近くになってからのこと。

めちゃくちゃ嬉しくって、私は聖君に抱きついた。聖君も喜んで私を見て、喜んでいた。

内緒だったのは、サプライズの意味もあったけど、私のお腹の具合がクリスマスの時どうなるか、わからなかったからだ。ホテルに泊まることをぬか喜びさせるのは悪いと思ったらしい。

「いいな。私も行きたいな」

ひまわりが思い切り羨ましがってる。すると母が、
「生まれたら二人きりで過ごせなくなるんだし、思い切り楽しんで
らっしゃいよ」

と、私たちに言ってくれた。

「うちにいたって、2人でよくいちゃついてるくせに」

「ははは、ひまわりちゃん。これでもみんなの前では気を使ってる
んだよ？俺ら」

聖君がそう言うと、ひまわりはさらに口をとがらせ、

「あれで？たまに平気でリビングでいちゃついてるじゃん」
と言ってきた。

「ははは。ひまわりちゃんも、今日かんちゃんとデートでしょ？楽
しんできてね。それじゃ、桃子ちゃん、出発しようか」

聖君はちよつと顔を引きつらせながらそう言って、さっさと私と
聖君のカバンを持って玄関を出た。

私も玄関を出ようとすると、

「気を付けるのよ。何かあったらすぐに連絡しなさいよ」
と母に言われた。

「はーい」

母は玄関まで見送りに来たが、すねてるひまわりは来なかった。
父は今日も会社。大変だよ、クリスマスも仕事なんて。

それから二人でウキウキしながら、ホテルまでの道を楽しんだ。
聖君はとにかくご機嫌で、カーラジオから流れる歌を思い切り歌っ
たりしていた。

車がホテルに到着した。ベルボーイが出てきて荷物を持ってくれ

て、聖君は車のキーを渡した。

それからカウンターにチェックインをしに行った。

「榎本様、ツインでご予約承っております」

う。ツインだって！聖君はサインをして、そしてホテルマンに案内され、私たちはエレベーターに乗った。

「夜景、綺麗に見える部屋ですか？」

聖君がホテルマンに聞いた。ホテルマンは笑顔で、はいとうなづいた。

「よかったね。今年も夜景見えるね」

聖君はそう言うのと、私にニコって微笑んだ。ああ、そんなことを思ってくれてることが嬉しい。

「来年は見れないかな」

「うーん、風はその頃何か月？泊まるのは難しいかもしれないけど、タワーにだったら一緒に登れるかもよ？」

「えっとね、9か月とかそのくらいかな」

「予定日はいつですか？」

ホテルマンが私に聞いてきた。

「あ、3月です」

「春生まれなんですネ。だんだんとあたたかくなる季節ですし、育てやすい季節ですね。9か月の赤ちゃんでも泊まれますよ。ぜひ来年も、いらしてください」

「はい…」

私はちよつと照れながらうなづいた。聖君は何も言わず、なんだかすんごい優しい目で私を見ている。

部屋に案内され、私たちは部屋に入った。ホテルマンは荷物を置いて、部屋を出て行った。

聖君は窓際に行き、カーテンを開けた。

「ああ、すげえ！観覧車は見えるし、ベイブリッジも見える。夜景、すごく綺麗だよ、きつと」

「ほんとだ。だけど夜景じゃなくても、今でもすごく綺麗だね」
「うん」

しばらく私たちは寄り添いながら、景色を眺めていた。

「夜ご飯はどこで食べたい？桃子ちゃん」

「うーん、どこがいいかな」

「朝食は上のレストランのビュッフェね」

「うん」

「ちょっとみなとみらい、散歩してくる？」

「美術館あったよね。今まで見たことなかったし、見たいかも」

「うん、いいよ」

私たちはホテルを出て、美術館に向かった。

そして二人で、のんびりと絵を見て回り、美術館の中にあるカフェでお茶をした。

「この美術館にいつか、聖君の絵が飾られたらすごいなあ」

「へ？なんでそうなるの？」

「なんか、いろんな絵を見てて、そう思っちゃったんだ」

「はは。飾られないって。第一、絵はあんまり描かないと思うよ？」

「なんで？あんなすごい絵を描いたって言うのに！」

「桃子ちゃん、鼻膨らんでるよ。興奮しないで、風が悪いよ」

「あ、うん」

私はホットミルクを飲み、ふうって軽く息を吐いて落ち着いた。

「いつか、描きたくなったら描くかもしれないけどね。今はそんな

に描きたいって感じじゃないんだ」

「：今は、何がしたいの？」

「そうだな。何かな」

聖君はコーヒーを一口飲んで、ちょっと遠くを眺めた。あ、考えてる時って、聖君よく、遠くを見るよね。

「そうだ。来年ね、亨さんがダイビングしに行きたいって言ってたんだよ」

「え？ そうなの？」

「うん。聖、一緒に潜ってくれよなって、この前亨さんの店に行ったら、そう言ってた」

「よかったね！」

「うん。まじで嬉しかった」

そっか。そうなんだ。聖君、今でもよく亨さんの所に顔を出してるんだな。聖君、すごく嬉しそう。

「今は、そうだな。桃子ちゃんとうして一緒にいたいのと、あとは、風が生まれてくるのが楽しみだな」

「：え？」

いきなり聖君が私を見て、そう言ってきた。

「しばらくは俺、子育てに専念しよう」

子育て？

「なんかさ、いろいろと今、子育ての本も買ってるじゃん？」

そうなんだよね。聖君、買ってきちゃうんだよね。

「見てて面白そうでさ。離乳食とか、俺、早く作りたいもん」

「ね、案外聖君って、保父さんにも向いてるかもよ」

「うゝゝん、どうかな。確かに赤ちゃん大好きだけど、俺、自分の子が一番！ みたいになりそうだし、人の子まで面倒みるかどうか」

「：」

なるほど。

「あゝ。風に早く会いたい、俺！」

聖君がそう言って、お腹に触ってきた。

「あ、今動いたね」

「わかった？」

「うん。なんかわかったよ。すげえ！」

聖君が大きな声を出して喜んだので、周りの人がこっちを見た。

「若い夫婦だね」

「旦那さん、すごいイケメン」

いつもながらの、皆さんの反応…。そして、

「あんなかつこいい旦那さん、羨ましい」

と言う声。これも何回聞いたことか。

私のお腹が大きいのが一目瞭然なので、誰にも何を言わなくても、夫婦だっと思われる。だから必ず、「イケメンの旦那さん」と言われている。

その声は、聖君の耳にも入っているはず。でも、聖君はまったくそんな声、無視している。

「これからどうする？桃子ちゃん」

「そうだな。ぶらぶら買い物でもする？」

「うん、いいよ」

私たちは美術館をあとにした。

ひゅー。外に出ると、北風が吹いていた。

「寒くない？」

聖君が私の背中に手を回し、抱き寄せた。

「うん。大丈夫」

くく。嬉しい。これ、夫婦の特権？人がいようがどうだろうが、こうやってべったりくっついて歩いてしまう。聖君もべったりくっついて歩くことは、抵抗がまったくないようだ。

それから建物に入ると、私は聖君の腕に引っ付いて歩いた。雑貨屋を見たり、聖君の洋服や、靴を見て回ったり、そして赤ちゃんのものを見て、しばらく聖君と可愛いねって言って、その場でぼけろくとしてみたり。

「桃子ちゃんの服や、靴は見なくていいの？」

「だって、着れないし。靴も、転ばないように運動靴しか今、履けないし」

「風が生まれたら、桃子ちゃんの可愛い靴や、服買いに来る？」

「うくくん。私のはいいや、別に」

「なんで？」

「風のが欲しいかな」

「でもさ、なんだかんだでかなり買っちゃってるよ？もう」

「だよね。お母さんも買ってくるし、聖君のお母さんも買ってくるしね。風、もうたくさん服もおもちも持ってるもんね」

「ほんと、みんなして気が早いんだから」

「でも、赤ちゃんのものって可愛いんだもん。つい見てると、買いたくなっちゃうのわかるな」

「まあね。俺もそれで何度か、誘惑されそうになったし」

「さつきもね。赤ちゃんのものを見てて、聖君、うずうずしてたでしょ？」

「桃子ちゃんもでしょ？」

「うん」

そうなんだよね。出かけると必ず、赤ちゃんのものを見てしまう。

うずうずしながら、買うのをやめるのはなかなかの一苦労だ。

それから、疲れたでしよって言って、聖君がベンチに座ろうって提案してくれた。私はよっころしよってベンチに座った。

「ごめん。桃子ちゃん、ここで待ってて。俺、さっきの靴、やっぱり買ってくるよ」

「風の？」

「俺の…」

ああ、どうしよかなって、めずらしく聖君が買うのを迷ってたやつか。うん。かっこいい靴だった。聖君に似合ってたのに、自分の物だけを買うことを躊躇しちゃってたみたいだな。

「いいのに。あ、それをクリスマスプレゼントにしたらよかったかな…」

聖君が靴屋に戻ってから、私は独り言を言っていた。

でも、セーター2枚も編んじやったし。いや、靴もプレゼントしたかったな。うっくん…。

私はさっきの店なら道順がわかるだろうと、聖君を追いかけた。とはいえ、お腹も大きいし、ゆっくりと歩きながら。

どうにか間に合えば、プレゼント用に包んでもらって、私が買うんだけどな。

どうにか、迷わず靴屋を見つけ出した。あ、聖君が靴を2足並べて、悩んでいる。あれ？さっきのに決めたんじゃないのかな。

「うっくん、やっぱ、こっちな」

「では、こちらにしますか？サイズはどうですか？」

店員は若い女性。顔を赤くしながら、聖君に聞いている。

「あそこにいる人、かっこよくない？」

後ろから声がした。ああ、このパターンも何回も遭遇している。

そしてそのあと、必ず、

「彼女いるのかな」

と、そんなことをぼそぼそと言う。それで、すごく積極的な子だと、

「声かけてみる？」

となる。

で、何度か本当に、逆ナンされてたこともあり、そのたび慌てて、私は聖君のもとに行く。

「ごめん、俺、結婚してるんだ」

私に聖君は手を差し伸べ、そう女の子に聖君は言う。前よりもずっと優しく、聖君は受け答えをするようになった。

「彼女いるよね」

「でもわかんないよ」

「じゃ、声かけてみる？」

そんな会話を聞き、私はそっと後ろを向いた。大学生か、高校生か。しっかりとお化粧をした、割と派手な女の子たちだ。

「男一人で買い物に来てるんだよ？クリスマスに。それって独り身だからでしょ？」

「あんなにかっこよくて、クリスマスに一人って、なんだか、怪しくない？」

「デートに行く靴を買いに来てたんだっけ？」

いいえ。お店で履くための靴です。今まではスニーカーを履いていたんだけど、ちょっと聖君は大人の男になりたいんです。で、スニーカーは卒業なんです！

何て心の中で言ってみた。あ、そうじゃなくて。聖君、レジに行っちゃった。早くに行って、私を買わないとプレゼントじゃなくな

っちゃう。

私はいそいそとレジに向かった。

「聖君」

「あれ？桃子ちゃん、ベンチで休んでなかったの？」

「うん」

「あ！まさか、ナンパでもされてたとか？」

「ううん。その靴、プレゼントする」

「へ？」

「クリスマスプレゼント。私からの」

「え？いいよ。だって、桃子ちゃんに俺、2枚もセーター編ませちゃったんだよ？」

「それは誕生日プレゼント」

「いいって、あれは一つが誕生日、一つはクリスマス」

「：でも、買ってあげたいんだもん」

私がそう言うと、店員は私と聖君を交互に見た。それから、私のお腹にも気が付いたらしく、あつという顔をした。

「うん。じゃ、お願いしようかな」

聖君は私がじいっと懇願の目で見ているからか、ようやくプレゼントにすることを受け入れてくれたらしい。

私はお財布からお金を出し、

「プレゼント用に包装してください」

と店員に言った。

「え？いいよ。別に、俺」

聖君がそう言いかけたが、私は聖君を見て、また懇願の目をした。お願い。プレゼント用にラッピングしてもらいたい。それを聖君にあげたいの。と、思い切り心を込め、目で訴えた。

「う、わ、わかった」

聖君はその目に根負けしたようだ。

「じゃ、俺、あっちで待ってるよ」

聖君はそう言うとお店の外に出た。私が聖君のほうを見ると、あ、さっきの子たちじゃないの！何か、聖君に話しかけてるよ。気になる。

でも、すぐにその二人は、去って行った。

プレゼント用にラッピングされたものを受け取り、私は聖君のところにいった。

「袋、持つよ」

聖君は持とうとしてくれたが、

「あとで渡す。それまで持ってる」

と私は渡さなかった。

「重くない？」

「このくらい、全然」

「そ、そう…」

「それより、さっきの子、なあに？」

「ああ、あの人は奥さんですか？っていきなり聞かれた」

「私のこと？」

「うん。だから、そうですけどって答えた」

「そうしたら？」

「じゃ、結婚してるんですねって、かなりびっくりされたけど」
「う、うん」

「それだけ。そのあとさっさと行っちゃったよ」

「逆ナン…」

「なわけないでしょ。奥さんがすぐそこにいるってわかって」

「でも、逆ナンしようと相談もしてたよ。さっき」

「…」

聖君は無言で呆れたって顔をした。

「私の幻聴じゃないってば」

「そうじゃなくて。そんな会話を聞いたなら、その場で私の旦那ですって言ってよ、桃子ちゃん」

「い、言えないよ」

「なんで？」

「でも、慌ててレジに行ったもん」

「ああ、そう」

あ、まだ聖君、呆れた目で私を見る。

いまだに、そういうことはなかなか言えない…。お店を手伝っていても、お客に妊娠していることを驚かれ、妊婦さんなのにバイトしてるの？って聞かれても、私はバイトじゃなく、聖君の妻なんですとは言えず、もじもじしてしまう。すると聖君が来て、

「バイトじゃないですよ。俺の奥さんなんです」

と言ってくれるんだけど。

ああ、いつになたら、堂々と私は奥さんですと言えるんだろうか。

風が生まれたらさすがに、言えるようになるのかな。

いまだにこんなで、本当にごめんね。聖君。

夕飯は、みなとみらいの夜景が見えるレストランで食べた。

「お誕生日おめでとう」

今、運ばれてきたジュースで乾杯をした。

「サンキュ。今年も桃子ちゃんに祝ってもらえた！」

聖君はすごく嬉しそうに目を細めてそう言った。

うわ。喜んでくれてる。こっちこそ、嬉しいよ。」

「あ、そうだ。プレゼント」

私は紙袋からラッピングされてる靴の箱を出し、聖君に渡した。

「ありがと。でも、本当によかったの？」

「うん！」

「…こんな包装までしてもらわなくても」

「だって、プレゼントだもん。リボンつけてもらいたかったし」

「…だよな。桃子ちゃん、最近さ、知ってた？」

「え？何が？」

「俺に何か頼みたいことがあったり、お願い事があると、目で訴えてるの」

「そうかな」

なんつって。それ、わざとしてるんだもん。

「俺、その目に弱いんだよ。うるうるってしてて、目の中に星まで見える。もろ、チワワとかの潤んだ目そのものだよね」

チ、チワワ？

「やっぱり似てるよ。桃子ちゃんって、小型犬に」

「…」

もう懇願するのはやめておこうかな。

「ところでさ、桃子ちゃん」

「え？」

「結婚してることも、俺の奥さんだってことも、どうどうとばらし
てもいいのにさ、なんで桃子ちゃん、いまだに恥ずかしくて言わ
ないの？」

う…。

「…そうなんだよね」

「まだ自信ないとか？」

「ううん。そういうんじゃないの」

「じゃ、何？」

「…恥ずかしいだけ」

「俺の奥さんでいることが？」

「…そうじゃなくって、あ、まだあれかな。実感が伴わない」

「…そう〜。そうなんだ。へ〜〜」

あ、なんだか意地悪な目つきだ。聖君。

「じゃ、何？今日も婚前旅行のつもりとか？」

「う、ううん。そんなことないよ」

「だよね？夫婦だし、だからどうどうとツインに泊まっちゃうし」

「うん」

「それもダブルベットのツインだよ」

「うん、そうだったね。大きなベッドでびっくりしちゃった」

「予約の時、言ったんだ。奥さん、妊娠しててお腹大きいから、大きなベッドにしてくださいって。そうしたら、ダブルベッドの部屋を用意してくれた」

「奥さんって言ったの？」

「そりゃそうだよ。奥さんでしょ？桃子ちゃんは」

聖君は、そう言う私の鼻をむぎゅってつまんだ。

「ごめんね。なかなか奥さんの自覚がなくて」

「いいけどね」

「呆れてるよね？聖君」

「いいよ。いつまでも〜も、俺も新鮮な気分でいられるし。いまだ

に結婚したての気分になれるしさ」

「…」

本当にそう思ってる？

「桃子ちゃん」

「え？」

「でも片思い気分はすっかり抜けてるよね？」

「え？ うん」

「そっか。そりゃよかった」

聖君はそう言ってにこりと笑った。ああ、確かに。もうそれはさすがに卒業したな。こうやってデートに出ても、思い切り聖君にひつついて、恋人気分を味わってるし。ちょっとは成長してるのかな。っていやいや、奥さんなんだから、このくらいで満足してちゃ、聖君に悪いよね。
ね？

レストランを出てからまた、私は聖君の腕にひつついた。

「聖君」

「ん？」

「こうやって腕組んで歩くの、すごく幸せだな」

「…そう？」

あ、今、聖君照れた。耳赤いし。私と聖君はしばらく恋人気分で、腕を組んでみたとみらいの夜景の中を散歩していた。

12月24日 聖君の誕生日 その2

「ひゅ〜〜〜」

「あ、風冷たいね。もうホテルに戻ろうか」

かなり北風が冷たくなってきて、私たちはホテルの部屋に戻った。そして熱めのシャワーを浴び、また二人でいつものように髪を乾かしあった。

「夜景綺麗だね、聖君」

「うん。眺めがすごくいいね〜」

髪を乾かし終え、私たちは窓際に行き、外を見た。

「すげえ、ロマンチックだな」

聖君がそう言うのと、思い切りにやけた。うわ。その顔はあまり、ロマンチックじゃないけど？

「二人きりだね。桃子ちゃん」

「ううん、お腹に風もいるから3人だよ」

「…そうか」

聖君は思い切りにやけていた顔を、元に戻した。

「聖君、3年前のクリスマスイブ、覚えてる？」

「覚えてるよ。二人で一緒にランドマークタワーに上った」

「夜景を見て、聖君、このネックレスをプレゼントしてくれたよね？」

「うん。今日してきてくれたんだね」

聖君は優しく私を見た。

「…あの時はずっと隣に聖君がいてくれたらいいなって、そう思ってたけど、まだまだ彼女でいることすら信じられないでいたなあ」

「俺も…」

「え？」

「沖縄いきで悩んでいた頃だ」

「私と別れることも考えてたの？」

「え？」

「別れて沖縄に行くこととか」

「…」

聖君が目を丸くして私を見た。

「俺から別れるってことは、一回も考えたことないけど？」

「俺からって？」

「だから俺から別れ話するとかさ」

「私からならあると思ってたの？」

「うん」

え〜！今度は私が目を丸くした。

「沖縄に行ってる間に、誰かが現れて桃子ちゃんのことかっさらっていったらどうしようとか、そんな不安あったよ」

「…」

「最初はね、大丈夫だろうって思ってたんだ。1年なんてあっという間だろうし、桃子ちゃんが卒業したら、桃子ちゃんが沖縄にきたらいいんだよな、なんてさ。かなり安易に考えてたし」

「途中で考えが変わったの？」

「うん」

「どうして？」

「幹男の出現とか？俺以外にも桃子ちゃんのそばにいる男いるんだって知って、かなり焦った」

「でも、幹男君は従弟だよ？」

「従弟って結婚できるでしょ？」

「できるけど、そんなこと考えたこともないよ？」

「だけど、もし俺が離れてて、ずっと会えないときに幹男に優しくされてたら、桃子ちゃんどうした？」

「：幹男君は聖君じゃないもん。どうもしないよ」

「え？」

「聖君じゃなきゃ絶対に嫌だし」

「：そっか」

聖君は私の背中に手を回して、そのままベッドに連れて行った。そして二人でベッドにドスンと座った。そして私の肩を抱き、聖君は、

「：沖縄いきはやめてよかったって思ってるよ」と耳元で言った。

「後悔したことないの？」

「ないな。まったくないや。きつと行ったら後悔してるだろうね」

「なんで？」

「桃子ちゃんを他の男に、取られることになって」

「だから、それ、絶対じゃないってば。ただ、すんごく寂しい思いはしただろうけど」

「：俺も」

「え？」

「桃子ちゃんとずっと離れてるなんて、ちょっと信じられないっていうか」

「う、うん」

「ぎゅ~~~~~」

あれ？抱きしめてきちゃった。

「桃子ちゃんの首から、フェロモンが…」

「出してないってば」

「…葉一と基樹とこの前、ほんのちょっとそういう話になって」

「そういうってどういう？」

「フェロモンの話」

どんな話だ。それって…。

「基樹、蘭ちゃんと付き合いだしてメロメロなんだよね」

「ええ？」

「前から蘭ちゃんに惚れてたけど、今はなんかもう、尻に敷かれて
るみたいな状態だね」

「そ、そうなの？あまり2人でいるところを見ないからわかんない
けど」

「明日来るって言ってたから、見えるよ」

「ふうん」

蘭も確かに、すごく仲いいんだってこの前、のろけてはいたけど。
尻に敷いちゃってるの？

「蘭ちゃん、その…基樹と結ばれたとか、そんな話をしたことある
？」

「え？う、うん。教えてくれた、そういえば」

「基樹、大変だったんだ」

「な、何が？」

「でれでれ状態。しばらく呆けてた」

「…」

「ま、無理もないって思ったけど。ほら、一回は別れて、もう付き
合えないだろうって思ってた相手だし」

「それでも基樹君、ずっと蘭のこと」

「ああ、好きだったんだよね。そんな子と結ばれたらそりゃ、天にも昇っちゃうよね」

「…」

そうなんだ。

「あ、俺も天に昇ってたけど」

「え?!」

私は思わず、聖君からちょっと離れて顔を見た。あ、やっぱりにやけてる。

「俺の話はいいか。そんでき、基樹がね」

よくない。聖君の話も聞きたかった。

「女の子っていうのは、フェロモンを出していると思わないかって聞いてきて」

「へ?」

「葉一も出してるとって言ってた」

「…聖君もそう言ったの?」

「うん。シャンプーとか、石鹸の匂いじゃないよねって」

うわ。男同士の会話? ボーイズトークですか? 私、聞いちゃっていいの? でも、ちょっと知りたいかも。

「きっとその子によって、匂いが違ってて、男のほうが自分の好きな匂いを嗅ぎ分けてるんだよ。なんて話をしてたんだ」

「わ、私はどんななの?」

「桃子ちゃんの匂い?」

「うん」

「……………」

うわ。また聖君、にやけた。

「すげえ甘い、可愛い、俺がメロメロになる匂い？」

何それ！うわゝゝゝ。

「あ、真っ赤になった」

「も、もうゝゝ。聖君の変態」

「なんでだよっ。だからさ、基樹の奴だって、蘭ちゃんのフェロモンにメロメロになったんだろ。俺が変態なんじゃなくて、みんなそうなの！」

「…あの葉君も？」

「あいつは言っとくけど、むっつりスケベなんだ」

「へ？何それ」

「俺の場合は、ちゃんと表面にも出してる、明るいスケベだけど、あいつは口では言わないだけで、内側がスケベなんだ」

「…そうなの？それ知ったら、菜摘、引くかも」

「ああ、そうか。菜摘、まだ潔癖なところあるもんな。菜摘の前じや絶対に、エッチなことは言わないんじゃないの？あいつ。だから、ムツツリになっちゃったのかな」

「…聖君たちの前だと言うの？」

「そりゃ、あいつもね、普通の男ですから」

「…」

やっぱり、ボーイズトークいいや。なんかいろんな人のイメージ壊れそうだし。

だけど、あれだ。聖君も天に昇ったって話は聞きたいかも。

「ねえ、聖君」

私は聖君のスエットの裾をひっぱった。

「なあに？おねだり？」

聖君が聞いてきた。

「え？どうして？」

「そういう声出して、また目を潤ませたから。あ、もしかして…」
「え？」

「そうか。そうだよな？そろそろ電気消そうか」

「そうじゃなくって！」

もう、そんなことおねだりしたりしないよ。

「さっきの続きが気になっただけで」

「続き？」

「聖君も、天に昇ったって話」

「ああ、え？知りたかったの？」

「…」

いきなり恥ずかしくなった。聞かなければよかったかな。

「も、もういい」

「でも知ってるでしょ？桃子ちゃん」

「何を？」

「桃子ちゃんと初めて結ばれた日の、でれでれな俺」

「え？」

「定期券は忘れて帰ったし、電車ですつとにやけてたし。それ、確か話したよね？」

「うん」

そうか。そのことかあ。

「…もう、桃子ちゃんってば」

「何？」

ドキ。こんなこと聞きたがったから、またエッチとか思ってるの？

「俺のこと、こんなに夢中にさせちゃって！フェロモン出し過ぎだ

よ」

「だから、出してないってば
もう〜。〜。」

「今も出してるよね？」

「出してない」

「桃子ちゃん」

「何？」

「俺ね、いいことわかつちやっただ」

「いいこと？」

「ネットで調べたら、臨月まで大丈夫なんだって」

「え？」

「もちろん、出血があったり、お腹が張ったりしたら即、やめたほうがいいらしいけど」

「…」

大丈夫って、その…？

「でも、夫婦で愛し合うのは、奥さんのほうも満たされたりするか
ら、いいみたいだよ」

「…」

やっぱり。

「で、桃子ちゃん」

「え？」

「お腹張ってたりしない？」

「うん、大丈夫」

「じゃあ、電気消そうか」

「…うん」

聖君が電気を消した。すると外の夜景がもっと綺麗に映し出され

た。

聖君はそつと私をベッドに寝かせた。

「お腹が張ってきたらすぐに、俺に言ってね？」

「うん」

ふわ。聖君が優しく私の髪をなで、そして、優しく長いキスをしてきた。うわ。とろける。

「今日はさ」

「え？」

「隣の部屋にひまわりちゃんがいるわけでもないし、一階にご両親がいるわけでもないんだから、桃子ちゃん、いいからね？」

「何が？」

「だから、声とかも出しちゃっても」

「へ？」

「いつも、ちょっと我慢して、押さえてるでしょ？声」
ギク。知ってたの？

「いいからね？今日は、遠慮せず、我慢せず出しちゃってもかゝゝゝゝ！私は思い切り、顔が赤くなった。」

「なんで赤くなってるの？」

「へ、変なこと言うからだよ」

「変じゃないって」

「もう！聖君のすけべ」

「え？なんで？」

「あほ」

「なんだよゝゝ」

聖君はそう言って、私の鼻をむぎゅってした。

「あんまり、聖君」

「ん？」

「尻がお腹にいるんだし、激しいのは駄目なんだからね」

「…はい」

「それに、あまり私のこと」

「ん？」

「刺激するのも駄目」

「刺激？」

「お腹張ったら困るし」

「はい。刺激もしません」

聖君はなんだか、叱られてる子供のように、素直に返事をしていく。

「だから、その…」

「ん？」

「や、優しく…ね？」

「はい。優しくします。思い切り」

聖君はそう言うのと、優しくキスをして、優しく、

「愛してるよ」

とささやいてくれた。

ああ、やっぱり。その声とキスだけでも、溶けちゃいそうだ。

今日も聖君は、本当に優しい。そして優しく、腕枕をしてくれた。

「お腹大丈夫？」

「うん」

嬉しいな。そりゃいつも一緒に部屋で、一緒にベッドに寝てるけど、やっぱり今日はなんだか違う。

「俺の誕生日なんだっけ」

「え？ うん」

「じゃ、桃子ちゃんも俺へのプレゼントだね」

「へ？」

「むぎゅ〜〜〜」

聖君が抱きついてきた。

「聖君」

「ん？」

「聖君の誕生日なのに、なんだか私のほうがプレゼントをもらったような、そんな気がする」

「俺をプレゼント？」

「う。っていうか、甘い時間とか？」

「甘い？」

「うん。溶けちゃうかと思ったもん」

「もう、桃子ちゃんってば」

聖君はそう言うのと、またキスをしてきた。それもとろけそうなの…。

「溶けた？」

「溶けた…」

「やばいね」

「え？」

「今日はなんだか、特別な感じがするね。ほら、ここからでも夜景見えるし」

「うん」

同じこと感じてたんだ。

「それに、ベッドもいつもよりも一回りもでかい」

「うん」

「隣の部屋にひまわりちゃんもいないから、遠慮することもない」
「…」

なんの？

「なのに、桃子ちゃんは、声をやっぱり押し殺してた」

「だ、だ、だから、それは」

「なんで？」

「恥ずかしいもん」

「だって、ひまわりちゃんも隣にいないし、聞かれる心配しないでいいんだよ？」

「聖君に聞かれる」

「へ？」

「それが恥ずかしいもん」

「なんで？ え？ なんで？」

「だって…」

「俺に聞かれるのを恥ずかしがってたの？ ずっと？」

「うん」

「なんで…！ 恥ずかしいことないじゃん」

「恥ずかしいものは、恥ずかしいもの」

「…なんだよ」

あ、すねた？

「聞きたいのに」

「もう…！ スケベ親父」

「どうせね、スケベ親父ですよ、俺は」
もう、開き直ってるし！

「ま、いっか。そのうちね」

「え？」

「今はほら、お腹に風もいるし、あまり激しいのは駄目だしね」
「だから？…なに？」

「風が生まれてから」

「そうしたら、2人っきりの時間だって取れなくなるよ」

「無理してでも作る」

「ど、どうやって？」

「さあ？」

「……………」

怖いぞ、聖君。この人そういえば、強引にお風呂と一緒に入ることも決行したんだっけ。時々、強引になるからなあ。

「聖君」

「ん？」

「そんなこと言ってて、あとでやっぱり、あんなこと言わなきゃよかったって後悔しない？」

「どんなこと？」

「私のこと、嫌になったり、がっかりしたり、引いちゃったり、呆れたり」

「え？桃子ちゃんがどうなって？」

「だから、その…。も、もっと大胆になったりして…」

「え?!?!?!」

なんでそんなに驚いてるの？

「それは、その…」

「え？」

「大歓迎です。俺」

「……………」
聞かなきゃよかった。

「もしかして、大胆になるのも我慢してた？」
「ううん！」

「いいんだよ？俺に遠慮しないでも」
「我慢も遠慮もしていないから！」

「桃子ちゃん。素直じゃないね」

「素直にそう言ってるもん」
「…」

聖君が、またまたくっついて顔を見た。

「もう寝る！」
「え？」

「寝るから」

私はよっこらしょっと、ベッドに座り、下着やパジャマを着て、またよっこらしょと横になった。最近は寝返りをうつのも大変だし、仰向けになるとお腹が重い。

「桃子ちゅわん。もう寝ちゃうの？」

「うん」

「でもまだ、11時だよ」

「もう11時だね」

「二人っきりの、イブの夜だよ？それも俺の19回目の誕生日」
「う…」

そうだった、誕生日だったんだ。

「聖君が19年前の今日、おぎゃくって誕生した日だよね」
「うん」

「…聖君、生まれてきてくれてありがとうね」

「…うん」

「聖君」

「ん？」

「愛してるからね？」

「…俺も、愛してるよ。桃子ちゃん」

聖君が優しくキスをした。

「ごめん、やっぱり眠い…」

その優しいキスでとろんとしちゃって、私はいきなり眠気が襲ってきた。

「じゃ、もう寝よう。桃子ちゃん」

「うん」

聖君も下着やスエットを着だした。でも、もうすでに私は半分うとうとしていた。

「おやすみ」

そう優しく聖君がおでこにキスをしてくれたのも、夢なのか現実なのかもわからないくらい…。

クリスマスイブ。聖君の誕生日。今日もまた、聖君の優しい腕の中で私は、安心してぐっすりと眠りについた。

風はお腹の中で、ぐにゅぐにゅ動いていて、なかなか寝てくれなかったけどね。まる。

12月25日 クリスマス

クリスマスの日、朝起きると、聖君が横ですうすうって寝息を立てて寝ていた。

あ、私のほうが先に目が覚めたんだ。うわ。寝顔が可愛い！しばらく寝顔を見てから、私は聖君のおでこにキスをして、よっころしょとベッドから降りた。窓の外には、綺麗な海の景色。そして青い空。

「ん〜」

あ、起きた？

「桃子ちゃん？あれ？」

横に私がないから、聖君びっくりしてるの？

「…」

しばらく聖君が無言で、目を開けてるのにぼけっとしている。

「ここ？」

「聖君、おはよう」

「え？」

聖君がやっと、窓際にいる私を見た。

「あ、そっか。ここ、ホテルか」

「よく寝てたね」

「…なんで桃子ちゃん、先に起きてるの？」

「え？今だよ、起きたの」

「なんでもう、ベッドから出てるの？」

「なんでって」

「もう〜、朝からいちゃつきたかったのに」

「……」

ダダこね聖君だ。一つ年を重ねても変わらないんだなあ。

私はベッドに行き、聖君の寝ている横に座った。

「おはよう、聖君」

もう一回聖君のおでこにキスをした。

「…おはよう」

聖君がちよっとすねながら、そう言った。

「クリスマス会の準備、手伝うんでしょ？」

「うん」

「それに、朝のビュッフェも行くんでしょ？」

「うん」

「顔洗って、行こう」

「まだいちゃつきたい…。桃子ちゅわん」

…やっぱり、駄々っ子だ。しょうがないって、私はまたベッドに横になった。

「桃子ちゅわん。今日は何をする？」

「クリスマス会の準備」

「夜からだから、夕方に戻ればいいって母さん言ってたよ」

「…じゃあ、どうしよう。ここって11時にチェックアウト？」

「うん。それまで、いちゃついてる？」

「…」

聖君、抱きついてきてるし。なんでこうも、いちゃつきたがるんだろう。

「上のレストランのビュッフェ、行こうよ」

「行くよ。でもまだ、時間大丈夫でしょ？」

聖君が私の顔をのぞきこみ、にへらって笑った。

「な、なあに？」

「今日も可愛いなって思ってた」

「…」

も、もう。朝から何を言ってるんだ。

「俺、夢見ちゃった」

「どんな？」

「桃子ちゃんが、熱い視線で俺のことを見て、誘惑してくる夢」
どんな夢なの？それ。

「海で会ったよ。俺と目が合ったらいきなり桃子ちゃんが、俺のほうに熱い目で寄ってきて、一人？一緒に泳がない？って誘って来るんだよ」

「え〜。それ、絶対に私じゃないよ」

「桃子ちゃんなんだって。俺、ドキドキして、うんってうなづくんだ」

「ドキドキ？」

私に誘われてドキドキしちゃったの？

「で、一緒に泳ぎに行くんだけど、いつの間にか海がプールになって、桃子ちゃん、お腹大きくて、周り見たらみんな妊婦さんで、マタニティスイミングしてるんだ」

「へ？」

「俺、びっくりしちゃって。でも、けっこう周りにも、奥さんと一緒に泳ぎに来てる旦那さんがいて、そのうちの一人がいきなり、生まれる！って騒ぎ出して、俺、おたおたしちゃってさ」

「…」

「で、桃子ちゃんは大丈夫？って後ろを見たら、桃子ちゃんが赤ち

「やんと一緒に泳いでるんだ」

「え？」

「もう風が生まれてたんだ。俺、すんげえびっくりしちゃって！いつ産んだんだよ！ってのけぞってびっくりしちゃって。で、目が覚めた」

「どんな夢……」。

「変な夢だよね」

「うん」

「あゝあ。熱い視線で誘惑して来たと思ったのにな。なんだ。あれ、結局は風と3人で泳ごうってことだったのかな」

「プール？3人で？」

「うん」

「行きたい。絶対に行こうね」

「くす。いいよ。風が何か月になったら行けるかな？3人で泳ごうね」

私は嬉しくて、聖君に抱きついた。

「お腹、張ったりしてない？」

「うん。大丈夫」

「じゃ、今日もデートしようか」

「うん！」

嬉しい。嬉しい。嬉しい。私はちょっとだけスキップをしながら、顔を洗いに洗面所に行った。

「ぶふ！」

それを聖君が見て、ふきだしていた。

「な、なあに？」

「桃子ちゃん、俺とデート、そんなに嬉しい？」

「うん！すごく嬉しい」

「あゝゝゝ、もうゝゝゝ。可愛いなゝゝゝゝ。なんでそんなに可愛いのかなゝゝゝゝ」

聖君はそう言うのと、ベッドにうつぶせて、足をバタバタして喜んでいる。

あゝゝ。もうゝゝ。そんな聖君がめっちゃ可愛いよ。

顔を洗い、着替えをして、レストランに私たちは向かった。聖君はホテルに泊まるからなのか、クリスマスだからなのか、ちよつと洒落込んでいる。といっても、いつものようにシンプルだけど。

白のシャツに、薄手のシンプルなカーディガン。それにチノパン。靴も革靴だ。私もマタニティだけど、ワンピースを着た。そのうえに、カーディガンをおい、靴もこの格好で、運動靴というわけにはいけないので、ペタンコの靴をはいた。

レストランに着いた。中に入ると、窓からすごく綺麗な景色が見えた。

ピアノも置いてあり、来ているお客さんはみな、泊り客だろう。外人さんもいれば、大人な感じのカップルもいる。

もしかして、ここ、ジーンズやスニーカーで入れるところじゃなかったとか？それ、聖君、知ってたのかな。

窓際の席に案内され、席に着いた。ふと視線を感じて見ると、隣の席の奥様も、逆側の席の外人さんの女性までもが、聖君を見ていた。

そうだよね。見ちゃうよね。今日は特に大人っぽくて、かっこいいもん。

前は隣にいて、引け目を感じてた。釣り合っていないんじゃないか

などか、みんな、私と聖君は似合っていないって思っていないかなとか。けど今は、ちょっと優越感を感じている。

私の旦那さん、超かっこいいでしょ~~~~！って心でいつも、叫んでる。そんな私、性格悪いかな。

「桃子ちゃん、料理取りに行こうよ。それとも俺が持ってこようか？」

「ううん、一緒に行く」

サラダ、パン、フルーツ、ジュース。卵料理やハムやソーセージ。お皿に入れて、席に戻ると、聖君はにこにこしながら、

「いただきます」

と手を合わせた。

「いただきます」

私もそう言うと、聖君はまず、ジュースを飲み、

「うん、上手い」

とそう言うってから、料理やパンを食べだした。

ああ、今日もほんと、美味しそうに食べるよなあ。

「ここ、いいね」

聖君が外を見てそう言った。

「うん。外の景色を見ながら朝食って、いいね」

「父さんと母さんにも、いつかプレゼントしたいな」

「え？」

「2人っきりで、どこかに泊まるなんてしたことないだろうからさ。ここの宿泊と朝食、予約してあげるのもいいなって思ってたさ」

「うん！いいかも」

「母さん、喜ぶだろうな」

「お父さんも、きっと今の聖君みたいに、美味しそうに食べるんだ

ろうね」

「…っていうかき、俺らみたいにな、2人っきりでいちゃつくんだろ
うな〜。あの夫婦」

「え？」

「う〜ん。父さん、やばいくらいにはしゃぐかも」

「お、お父さん、はしゃぐの?!」

「母さんと2人になったら、はしゃぎそうだよ」

そ、そうなんだ。なんだか、可愛い夫婦なんだなあ。

「いいな。いつまでも仲いいって」

「俺らだって、いつまでも仲いいよ。絶対に」

「…そうだよね？」

なんてったって、いつまでもバカップルだもんね？

レストランを出て、私たちは先にチェックアウトを済ませ、それ
からみなとみらいをぶらついた。

海を見に行ったり、赤レンガ倉庫のほうまで、足ものばした。

「ここ、みんなで来たね」

「うん」

なんだか、ついこの前のような気もするし、ずいぶん前のような
気もする。

「桃子ちゃん。寒くない？」

「うん。ちょっと風が冷たいかな」

聖君は私の手を取って、聖君のジャケットのポケットに入れた。

「あったかい」

「…桃子ちゃんの手は、ふわふわしてて、可愛いよね」

「え？」

「最初に手をつないだ時から、そう思ってた」

「そ、そうなの？」

なんか照れちゃうな。

「だから、俺、しょっちゅう手をつないでいたかったんだよね」

「そうなの？でも、腕も組んでもらいたかったんじゃないの？」

「あれ？ばれてた？それ」

「うん」

「手をつなぐのもいいけど、腕組むと、もっと桃子ちゃんと接近できるじゃん」

「…」

それ、私も思ってたな。今でも、聖君の腕にしがみつくのは、聖君にぴとってくっつけるからなんだよね。

「昨日そういえば、籐也、ライブしたみたいだね」

「メジャーデビューして初のライブでしょ？」

「うん。どうだったのかな。花ちゃん、見に行ったんでしょ？」

「そういえば、メール来てないね。あ、そっか。私、聖君とホテルに泊まるって言ってたから、遠慮してるのかもしれない」

「ま、夜、店に来るから、話も聞けるかな」

「うん」

「そういえば、ここじゃないけど、桐太もホテル予約して、麦ちゃんと泊まってるはず」

「え？そうなの？」

「あれ？桐太から聞いてない？」

「うん。クリスマスは麦と過ごすって、ずくくと浮かれてたのは知ってるけど」

「あははは。俺がホテル予約して、それを桐太に言ったら、あいつ

も予約するって、かたっぱしから電話したみたいだよ？」

「そんなになかなか、とれないものなの？」

「俺はかなり早くに予約しちゃったから。でも、桐太も山下公園のあたりのホテル、予約できたって、言ってたけど」

「わあ。あの辺もいいよね」

私はそう言いながら、聖君にぴったりくっついた。

「…あれ？それじゃ、もうあの2人って」

「え？」

「もう、結ばれて？」

「そりゃそうだろう。あいつらだって、それなりの年齢なんだし」

「…」

「だと思っけど。待てよ。そういう話は桐太から聞いたことないな」

「…じゃあ、まさか」

「昨日の夜、初めて結ばれちゃった…なんて！」

聖君がおどけながらそう言った。

「も、もう…。聖君、言い方がすげべ」

「なんで?!」

「まあ、いいや、聖君はスケベ親父だし、エッチなんだし、しょうがないよね」

「…なんだよ、それ」

「えへ」

聖君のポケットに入れてないほうの手で、聖君の腕にしがみついた。

「なんだよ、それ！」

「いいの。そんな聖君でも、私は呆れたりしないからね？」

「……なんだか、喜んでいいんだかどうなんだか」

「ねえ、聖君」

「え？」

「聖君が実はスケベでエッチだって知らない女の子たちが、さっきからこっちを見てるよ」

「え？」

「注目浴びてる。聖君、今日かっこいいんだもん」

「若い夫婦だから、みんな見てるだけだよ」

「そうかな。目をハートにさせてると思うけどな」

「隣に奥さんがこんなにべったりと、ひつついてるの？」

「…ひつついてないと、誰かがまた聖君に言い寄ってきそうで」

「あはは。桃子ちゃんも変わったよね」

「え？」

「やっぱ、たくましくなったよ」

「…そうかな」

それから、聖君とみなとみらいをぶらぶらして、大きな観覧車が見えるレストランでランチをして、そして江の島に車で行った。

江の島までも、ドライブを楽しめて、本当にずっと恋人気分を味わえた。

「聖君。二日間楽しかった。ありがとうね」

「え？こっちこそ。最高の誕生日だったよ？」

「ほんと？」

「本当。桃子ちゃんとこんなにずっと2人っきりでいられたし、昨日はいちやつけたし」

「…」

それだったら、いつもいちゃついてる気もしないでもないけど。

「さて、夜はみんなとクリスマスを楽しめますか」

「うん」

みんなに久々に会う。籐也君にも、桐太にも、ずうっと会ってない。

お店に着くと、すでに麦さんが来ていて、お店を手伝っていた。

桐太はまだ、サーフィンショップのバイトがあって、クリスマス会はお店を閉めてから来るらしい。

「二人で昨日泊まってきたんだろ？」

聖君がそう、いきなり麦さんに聞いた。麦さんは、一気に赤くなっ

た。「：そ、そっちこそ、みなとみらいのホテルに泊まってるって、桐太が言ってたけど？」

「うん。泊まってきた。最高だったよ」

聖君がにっこりと微笑んでそう言った。

「あ、そう。さすが、夫婦は違うよね」

「何が？」

聖君がきょとんとして聞いた。

「ホテルに泊まるのも、あまり気が引けてないっていうか、堂々としてるっていうか」

「気が引けてたの？」

「だって、親には友達の家泊まるって嘘ついたし」

「あゝ。そうか。そりゃそうだね」

聖君は納得したようにうなづき、

「俺らは、そりゃ夫婦だから、榎本聖と榎本桃子で予約もしたし、ダブルベッドの部屋にもらったし。どうどうと泊まってきたよ」

と、思い切り鼻高々にそう言った。

「なんか、悔しい」

麦さんがそう言って、悔しがっている。

「なんだよ。悔しがらなくてもいいじゃん。桐太と2人でクリスマス過ぎせたんならそれでさ」

聖君がそう言くと、また麦さんは赤くなった。そして、それ以上は何も言わず、さっさとキッチンの奥に行ってしまった。

「んゝゝ。やっぱり」

聖君がそれを見て、にやりと笑った。ああ、もう。その顔もかなり、スケベ親父だってば。

「こんちはゝゝ」

元気にドアを開けて、基樹君と蘭が入ってきた。

「お！早いじゃん」

「うん。早くに行って、なんか手伝おうって蘭と話しててさ」

「桃子。メリークリスマス。桃子はお腹大きいんだし、休んでいいよ。私、手伝うから」

蘭がそう言くと、なんとエプロンをカバンから出して、

「お婆さん。私もなんか手伝います」

と言って、キッチンに入って行った。

「お、驚いた。あの蘭が」

私が目を丸くしてると、

「蘭、今、料理も特訓中なんだよ」
と基樹君が言った。

「え？」

「俺のために、頑張ってるんだってさ」

「え?!」

「手作りの料理、食べてもらいたいんだって」

「え〜! あの蘭が?」

「へへへへへ」

あ、基樹君が思い切りにやけた。

それから、菜摘と葉君もやってきた。そして花ちゃんは、顔を赤くしながら、籐也君と手をつないでお店に入ってくるし…。もうどっからどう見ても、恋人だよね。

そして、ひまわりはかんちゃんと一緒に、ぎりぎりの時間にやってきた。

夜の7時。クリスマス会は始まった。

「あれ? 杏樹ちゃんは?」

「今日も塾なのよ」

聖君のお母さんが、乾杯したシャンペンを飲みながらそう言った。

「クリスマスでも?」

私が驚いてそう聞くと、

「塾が終わったら、元彼連れてすぐに行くって言ってたけどね」
と、後ろから聖君のお父さんが言った。

「元彼?」

へ〜。そうなんだ。連れてきちゃうんだ。

みんなで料理を食べ、笑って話していると、桐太が息を切らして入ってきた。

「おお! 桐太、お前の分も食べちゃったぞ」

聖君がそんな意地悪なことを言うのと、

「麦、ちゃんと俺の分もあるよね?」

と桐太君は、聖君を無視して麦さんに聞いた。

「あるよ」

麦さんは嬉しそうにそう言うと、桐太にジュースを渡したり、食べ物を取り分けておいたお皿を持って行ったりしてあげている。

「サンキュー」

桐太がそう言って微笑みかけたら、麦さんが赤くなりながら笑った。

うわ。なんだか、2人の世界ができあがってる。

ふと気が付いて、店内を見回すと、驚いたことに、みんなカップルだった。

そこへ、杏樹ちゃんが登場。

「草刈君。入って入って！」

元彼を本当に連れてきちゃった。

聖君はちょっと眉を引きつらせたが、聖君のお母さんとお父さんが和やかに、

「いらっしやい。ジュースでいい？」

とか、

「いっぱい食べていけよ？」

とか言っただけで、草刈君は照れくさそうに、はいつてうなづいていた。

あれ？ なんだか、杏樹ちゃんともいい雰囲気じゃない？

「ね。聖君」

「んんんん？」

あれ？ 聖君ってば、ご機嫌斜め？ 杏樹ちゃんのことかな。

「ここにいろんって、みんなカップルだよ。気づいてた？」

「あ、そういえば」

「ね？すごいね？」

「：うん」

聖君がにっこりと笑った。

店内にはクリスマスツリーも飾られ、外のウッドデッキの周りには、電飾が飾られ、窓には、トナカイとサンタさんの絵が貼っている。

ああ、思い切りクリスマスだ。

来年には、この辺を風がはいはいでもしてるんだろうか。きっとあのクリスマスツリーも、喜んではいで見てるんだろうな。

店内は笑い声が絶えなかった。みんなものすごく嬉しそうに笑っている。

ああ、いいな。この雰囲気。ずっとこんな笑顔がいっぱいの毎日が、続いたらいいな。

そんなことを思いながら私は、また聖君の腕にひつついた。

「聖君」

「ん？」

「メリークリスマス」

チュ。そっとみんながわいわいとしている後ろのほうで、私は聖君にキスをした。

「：もう、桃子ちゃんってば」

聖君がほっぺを赤くして、照れた。

その笑顔も、めっちゃ可愛くて、私は胸をきゅん！ってさせていたのであった。まるく。

1月元日 祖父の家

いつもなら、お正月は伊豆に行く聖君。今年は私の父の親戚、母の親戚の集まりに行くことになった。

まず、母の祖父の家に。聖君の絵も飾っており、祖父も祖母も聖君のことは大歓迎なんだけど、ただね、一人反対してる人がいるんだよね。う、ちょっと会うのが嫌だなぁ。

「桃子、実果おばさんのことなら、気にすることないわよ」

車の中で顔が沈んでいたからか、母にズバリそう言われた。するとひまわりが、

「お姉ちゃんに何か言ってきたら、私がおばちゃんを怒ってあげるから大丈夫」

と頼もしいことを言った。

「ひまわりちゃんが怒る？」

それを聞いていた聖君が運転しながら、バックミラーを見た。

「かえって話がややこしくなるから、ひまわり、ちょっと今日はおとなしくしてて。実果おばさんのことなら、おじいちゃんに任せておくのが一番だから」

「はーい」

ひまわりは口をとがらせた。

「で、幹男君も来るんですか？」

聖君がちょっと嫌そうな顔をして、母に聞いた。

「さあ。去年はスキーだかスノーボードかをしに行っててこなかったし、今年も来ないんじゃない？」

母がそう答えると、聖君はほっとした顔をした。ああ、聖君は幹男君が嫌いかなぁ。

祖父の家に着き、聖君を残してみんな車から降りた。聖君は駐車場に車を停めに行った。

「明けましておめでとうございます」

母がそう言いながら、祖父の家に入った。祖父と祖母が出迎えてくれて、私や父、ひまわりもぞろぞろと中に入った。

「桃子ちゃん、お腹大きくなったわね〜」

祖母がそう言いながら、スリッパを出してくれた。

「足、冷やしたらお腹に悪いから、ちゃんとはいてね」

「はい」

「ひまわりちゃん、背がまた伸びたんじゃない？」

祖母が今度はひまわりに聞いた。

「うん。伸びたよ。おばあちゃんは縮んだ？」

「こら、ひまわり」

ひまわりの言葉に母が怒り、祖母は苦笑いをしていた。その横で、あはははと豪快に祖父が笑っている。

リビングに行くと、実果おばさんとおじさんがいた。

「おめでとうございます。お姉さん、お義兄さん。今年もよろしく願います」

母がそう丁寧に挨拶をすると、

「おめでとうございます。こちらこそ今年もよろしく」

とおじさんのほうは挨拶をしたが、実果おばさんは、私のお腹をじろじろと見て、

「桃子ちゃん…」

と眉をしかめて何かを言おうとした。

母が警戒をした。祖母が何かを察して私のほうに、慌てて歩いて

きた。ひまわりも私のすぐ横にやってきた。

だがそこに、すごい元気に、

「明けましておめでとうございます!」

と、聖君がリビングに入ってきた。

「ああ、聖君、明けましておめでとう。今年もよろしくな」

祖父がにこにこしながらそう答え、

「聖君。おめでとうね。さ、中に入ってここに座って!」

と祖母も朗らかにそう言うのと、聖君をソファに座るよう促した。

「あ、初めまして。榎本聖です」

聖君はソファに座らず、実果おばさんとおじさんを見て、ぺこりと丁寧にお辞儀をした。

「やあ、初めまして。へへへ。桃子ちゃんの旦那さん、すごくイケメンなんだね」

おじさんがそう言った。

「初めまして」

実果おばさんも聖君に挨拶をした。

また母も祖母も、実果おばさんが何かを言い出すんじゃないかと警戒した。が、

「幹男がそういえば、あとで来るって言ってたわ。なんでも聖君に会いたいからとかなんとか」

とおばさんは、いきなり言い出した。

「え?」

聖君はちょっと顔が引きつった。

「あらそう? 聖君は幹男君とも仲がいいのね」

祖母にそう言われ、ますます聖君は顔を引きつらせた。

「おじいちゃん、おばあちゃんが気に入るだけの男だよって、そう

幹男が言ってたわ。それになかなかのイケメンだって」

え？

「ほんと、こんなにかっこいいとは私も思ってもみなかったわ。だけど、心配じゃないの？結花」

実果おばさんが母にそう聞いた。

「心配って？」

「これだけかっこよかったら、モテるでしょう。それに、聖君は桃子のこと本気なの？」

うわ。ズバッと聞いてしまったよ。

「お姉さん。当たり前でしょ？聖君が本気だってわかってるから、結婚だって許したんだし」

「お腹に赤ちゃんができたから、許したんでしょ？」

母の言葉に実果おばさんが、きつい口調で言った。ああ、姉妹喧嘩がまた始まったの？この二人、必ず一回は言い合ってるよね。正月中に。

すると聖君が2人の間に入り、

「すみません、僕はすごい本気ですけど」

と、話に割り込んだ。

「え？」

実果おばさんが、びっくりした顔で聖君を見た。

「本気じゃなかったら、結婚しません。いえ、お付き合いもしていませんけど？」

聖君はすぐ真面目な顔つきで、そう堂々と言った。

「…」

実果おばさんは何も言えなくなっていた。

「あははは。実果。お前もそのうちに聖君の良さがわかるさ。さ、

そのくらいにして、乾杯でもしよう」

祖父がそう言うのと、

「そうね。さ、ダイニングのほうに来て、みんなで食事にしましよう」

と祖母も明るくそう言った。

ほ……。喧嘩にならずにすんだ。私は聖君の横に行き、腕にしがみつき、

「ありがとう」

と小声で言った。

「え？何が？」

「本気って言うてくれて」

「え？」

聖君が目丸くして私を見ると、

「何それ。当たり前のことを言っただけじゃん。あはは。お礼を言われることじゃないってば」

と笑いながらそう言った。

う。なんて爽やかな笑顔なんだろう。なんだか空気すら重たくなっていたのに、一気に今、爽やかな風が吹き抜けていったような気がするよ。

そのあとは、みんな和やかに食事をして過ごした。

「なんだ、幹男ちゃん、来ないじゃん」

お腹いっぱい食べたひまわりは、ソファーにどかって座りそう言った。母と実果おばさんは、キッチンで片づけを手伝っている。

「ひまわり、ずいぶんとうちに来なかったから、聖君の描いた絵も見えないだろう。アトリエに来て見てみないか？」

祖父がひまわりにそう聞くと、

「見たい！見たい！」

とひまわりが立ち上がった。

「あの絵、完成したのをまだ、僕も見えてないですよ」

父もそう言っ、祖父やひまわりと一緒にアトリエに行った。おじさんも見てみたいと関心を示し、一緒についていった。

私と聖君も、アトリエに行くことにした。聖君はかなり、照れくさそうにしていたけど。

「は~~~~~~~~。これ、お兄ちゃんが描いたの？すっご~~~~い」

ひまわりが口をぽかんと開けた。

「素晴らしい絵が完成したね」

父も目を丸くして、喜んだ。

「これを聖君が描いたのかい？」

おじさんも驚いている。

当の本人は、顔を赤くして、頭をぼりって掻いて、思い切り照れている。

「なかなかいい素質を持っているだろう」

「そうですね、絵画教室の跡を継げるかもしれないですよ」

おじさんがそう言っ、聖君がすかさず、

「無理です。俺の場合は何の知識もないっすから！」

と、慌てて手を顔の前でぶんぶんと振りながら言った。

「は~~~~。それにしてもすごい。実果にも見せよう。きっと驚くぞ」

おじさんはそう言っ、キッチンのほうに行った。

「実果はずっと絵を描いていたんだよ」

祖父の言葉に私は驚いた。

「え？それ初耳」

「結花なんて、1回だけしか描かなかったが、実果は子供のころから絵を描くのが好きだったんだよ」

「へへへ。知らなかった」

ほんと、実果おばさんが絵を描いていたなんて聞いたこともないし、母からも聞いたことがない。

そこに実果おばさんがやってきた。

「え?! この絵、聖君が描いたの?」

あ、ものすごく驚いている。

「それも、はじめて描いた絵だよ。すごい才能だろ?」

祖父がそう言うのと、しばらく実果おばさんはじっと絵に魅せられていた。

「すごいわね。圧倒されるわ」

「この絵は聖君そのものだよ」

祖父が言った。実果おばさんはやっそこ絵から視線を外し、聖君を見た。

「あなた、すごいのね」

「え? い、いえ」

聖君が困っている。

「将来、何になりたいの?」

「僕はまだ、決まってないです」

「え? なんにも?」

「はい」

「結婚もしたのに?!」

実果おばさんが呆れている。

「どんな仕事に就いたとしても、彼なら成功させるし、才能を発揮

できるよ」

祖父がそう言った。

「そうですね。聖君なら、すべてをプラスにしてしまう力がありますからね」

父もそう言って、聖君を見た。そして肩をぽんとたたいた。

「あ、ありがとうございます」

聖君は耳まで赤くして、照れてしまった。

「ははは。まあ、仕事に就くことができなかったら、ここで絵を描いて画家になればいいさ」

「は？」

祖父の言葉に、聖君が驚いた。

「いや、うちの会社に入って、僕の部下として働いてもらうっていう手もありますよ。聖君がうちの会社に来てくれたら、ありがたいけどな」

「え？」

聖君は今度は父の言葉に驚いている。

「だけど、もっともっと君はいろんな才能を秘めてるからねえ。これからがほんと、楽しみだよ」

父がそう続けると、聖君はまた驚いて目を丸くしたが、それよりも、実果おばさんとおじさんのほうが驚いてしまっている。

「そ、そんなに2人が認めるくらいの、男なんですね」

おじさんが感心した。実果おばさんはただ、聖君を見ている。とそこへ、ピンポンとチャイムが鳴り、幹男君がやってきた。

「おめでとうございます」

玄関に出向いた祖父に、幹男君が挨拶をして、祖父はそのまま幹男君をアトリエに連れてきた。

「幹男、遅いじゃないの」

実果おばさんに幹男君は、さっそく怒られた。

「それより、幹男、来たそうそうで悪いが、どうだ。この絵を見て祖父が幹男君の背中をぽんとたたき、聖君の絵を見せた。」

「この絵ですか？おじいさんの絵にしては、なんだか、ダイナミックと言うか、力強いですね」

「僕が描いた絵じゃないさ」

「じゃ、生徒さんですか？すごい絵を描く生徒さんがいるんですね」「幹男は、どんな人物が描いた絵だと思うかい？」

「そうですね」

そんな質問を祖父がしたから、みんな聖君が描いたんだということとは黙って、静かに幹男君を見ていた。ただ一人、聖君だけは、その場にいたくないって顔をして、幹男君とは違う方を向いている。

「うーん。大胆で、器が大きい男の人。あ、男性ですよ？描いたのって。でも、繊細さもあるんだ。それからすごい色鮮やかだけど、きつと多彩な才能の持ち主なんじゃないですか？」

「ははは。大当たりだな」

祖父が笑った。

「へえ。そんな生徒さんがいるんだ」

「幹男、生徒さんじゃないんだよ。描いたのはここにいる聖君だ」「え？！」

幹男君が驚いて聖君を見た。

「ども…」

聖君が軽く頭を下げた。でも顔は、かなり無愛想。

「へー。君が描いたの？こりゃ驚いたな」

幹男君はそう言うのと、あははっていきなり笑い出した。聖君は笑われて、ムツとしている。

「幹男、何を笑ってるの？」

実果おばさんが聞いた。

「ああ、だってさ。やっぱ、すげえ男だなんて思って。母さんだっ
てそう思わない？会ってわかったでしょ？やたら桃ちゃんの結婚を
ぐちぐち言ってたけど、こんだけすごい男と結婚したんだから、も
う文句言わず、祝福してあげたら？」

幹男君がそう言った。その言葉に私も聖君も、びっくりしてしま
った。

「そうね。なんだか、みんながみんな、聖君に魅了されちゃってる
から、文句も言えなくなってきたわよ」

実果おばさんがそう言うってから、聖君を見て、そして私を見た。

「桃子ちゃん、今、もしかしてすごく幸せ？」

「え？はい！」

「そうよね。そう見えるわ。さっきからずっと、聖君に寄り添って
嬉しそうだったし。そうとう、彼が好きなのねえ」

「…は、はい」

私は顔を赤くして、うなづいた。

「じゃ、大好きな彼と結婚できたんだ」

「はい…」

聖君は黙っていたが、

「それ、僕もなんですけど」

とぼそって言いだした。

「え？」

実果おばさんが聖君を見た。

「僕も、桃子ちゃんと結婚してすごく嬉しいし、幸せなんです」

そう聖君が言うと、実果おぼさんは黙って目を丸くして聖君を見たが、その横でまた幹男君が笑った。

「そうそう。こいつ、すんげえ、桃子ちゃんが好きなんだよ。俺なんて何度も嫉妬されちゃって、大変だったんだからさ」

幹男君の言葉に聖君は、顔を赤くして、

「何度も嫉妬って？」

と怒った口調で聞き返した。

「あれ？本当のことじゃん。でも、そんだけ桃子ちゃんに惚れてて、大事なんだろう？」

「今頃わかったんすか？」

まだ聖君は怒ってるみたいだ。ムツとしている。

「ふん。わかってたよ。沖縄いきをやめた時点だね。ああ、こいつ、本当に桃子ちゃんから離れられないんだなって」

「…」

聖君はまだムツとしている。

「で、結婚もしちゃって、桃子ちゃんをとても大事にしてるみたいだし、もう俺には何も、言うことはないよ」

「…」

聖君はちよつと睨むように幹男君を見ている。

「ちよつと、あなたたちって仲悪いの？」

実果おぼさんが聞いた。

「そりゃ、可愛い桃子を取られたんだから、幹男だって、聖君に嫉妬するのも無理もないさ」

祖父がそう言って、聖君と幹男君の肩を、ぽんぽんとたたいた。

「さ、リビングに行って、お茶でも飲んでゆつくりとするか。そう
だ。聖君は囲碁はやらないのかい？」

「はい、囲碁はできません」

「じゃ、耕平君、どうだい？」

「はい、いいですよ」

父と祖父はそのまま、和室に行き、どうやら囲碁を打つらしい。

実果おばさんは、ご飯まだでしょと言って、幹男君をダイニング
に連れて行った。おじさんもそのあとを、続いて行った。

アトリエにはひまわりと私と、聖君が残った。そしてしばらく3
人で椅子に座って、のんびりとしていた。

「お兄ちゃん、やっぱ、すごいわ」

まだひまわりは、聖君の絵を見て圧倒されている。

「サンキュ、ひまわりちゃん」

「：なんだか、お兄ちゃんってさ、底知れない何かがあるよね」

「お、ひまわりもそう思うの？」

私が聞くと、ひまわりは私のほうを見た。

「お姉ちゃんもそう思った？」

「うん。この絵を見て、聖君の才能やいろんな可能性を、潰しちゃ
いけないなって思ったよ」

「潰す？」

「うん。私がそれを邪魔したりしないで、もっと聖君がどんどん羽
ばたけるよう、何か私にもできることがあったらいいなって、思っ
たりもしてたんだ」

「ほえ……。そうなんだ」

ひまわりがやたらと感心した。

「なんか、照れる」

聖君は私の横で、頭を掻いた。

「…俺はさ、俺のすごさとかわかんないし、可能性もよくわかんないんだよね。でも、やってみたいことは挑戦しようって思ってるよ」

「…うん」

「だけど、桃子ちゃんにも桃子ちゃんにしかできないことや、いろんな才能があるんだから、桃子ちゃんもやってみたいことは挑戦してみたら？」

「え？私が？」

「うん。あるでしょ？してみたいこと」

「…聖君のお母さんみたいなの、カフェ？」

「…それ、したかったら挑戦しなよ。ね？」

「…うん」

「そっか。お姉ちゃんにはやりたいことがあるんだね」

ひまわりが私の横で、ぼそっとそう言った。

「ひまわりちゃんにはないの？」

聖君が聞いた。

「私、まだわかんないや」

「そうだね。俺もわかってないよ。だけどさ、きっと見つかったいくよ。焦らなくてもさ」

「…一つだけあるかな」

ひまわりがそう言った。

「何？」

「お姉ちゃんやお兄ちゃんみたいに、だ〜〜い好きですんごく大事に思える人と、結婚する。これはもう、決めてるの！」

ひまわりの言葉に、私と聖君は顔を見合わせ、クスって笑った。

「それ、きつと叶うから大丈夫だよ」

聖君はひまわりのほうを見て、優しくそう言うと、ひまわりも嬉しそうに笑った。

実果おばさんも、聖君を気にいっちゃったみたいだし、幹男君はなんだかすっきり、聖君を認めたみたいだし、聖君のほうはまだ、幹男君が苦手みたいだけど、ま、それもいつか。

祖父の家でそのあとも、私たち家族は楽しく過ごし、夜、お酒を飲んで酔っ払った母と父を車に乗せ、家に帰ったのであった。まる。

2月13日 バレンタイン前日

今年もまた、バレンタインの季節がやってきた。我が家に菜摘、蘭がやってきて、チョコづくりをすることになった。

去年と違うのは、そこにひまわりも参加していることだ。

「うわ。こんなになっちゃったよ」

ひまわりは初のチョコづくりに苦戦している。溶かして型に入れるだけなんだけど、手もそのへんも、チョコだらけにして慌てている。

「大丈夫だよ。ひまわりちゃん。あとは型に入れるだけなんだから」
菜摘が余裕の発言をした。菜摘と蘭と私は、チョコブラウニーと
いうのを作っている。

「ねえ。蘭」

私はちらっと蘭を見ながら、

「基樹君と仲いいよね」

と言ってみた。

「え？」

「聖君もよく言ってるんだ。蘭ちゃんと基樹、たまに店に来るけど、
べたべただよって」

「聖君が？」

「うん」

「そ、そんなに私らべたべたしてないよ」

「え〜〜。そうかな。クリスマス会でもべたべたしてたじゃん」
菜摘もそう言いだした。

「菜摘と葉君だって、仲いいじゃん」

「私たちは前から、変わってないよ。葉君って前と変わんないもん」

そういえば、仲いいけど、べたべたくっつくことはないな。葉君と菜摘。

「桃子と聖君には、うちらも負けるって」

蘭が私を見て、わざと腕を私にぶつけたりした。

「ね？ ひまわりちゃん。聖君と桃子、家でも仲いいんでしょ？」

「うーん。最近あまり、いちゃついてないかなあ」

「え？」

菜摘と蘭が同時にひまわりを見た。

「け、倦怠期とか？」

菜摘が今度は私の顔を、申し訳なさそうに見ながら、そう聞いてきた。

「違うよ。ね？ お姉ちゃん。お姉ちゃんのお腹大きいから、お兄ちゃんもべたべたしなくなったっていうか」

「お腹大きいから、べたべたしないって、やっぱり、倦怠期」

蘭も私に申し訳なさそうに聞いた。

「仲はいいよ。ただ、お兄ちゃん、お姉ちゃんのお腹をすごく気遣ってる。お姉ちゃんが少しでもお腹をさすっていると、桃子ちゃん、お腹張ってるの？ 大丈夫？ って言って、お姉ちゃんの周りをうろちよろしてるんだよね」

「うろちよろ？ 兄貴が？」

「そうなんだよねえ。聖君、そういう時にどうしていいかわかんないみたいで。だから前みたいに、抱きしめてくれたりしなくなっちゃったし」

「え？ 抱きしめる？」

菜摘が目点を点にして聞いてきた。

「おかえり！ただいま！のハグも玄関でしてないよね」
ひまわりが私に言った。

「うん。玄関に私がたどりつく前に、リビングのほうに来ちゃうんだもん」

「ハグ？じゃ、今まではいつも、ハグしてたってこと？」

蘭が目丸くして聞いてきた。

「あ、でも、いまだにお風呂は一緒に入ってるよね」

ひまわりがしれっとそう言った。

「一緒に、お風呂くくく？！」

菜摘と蘭が同時に叫んだ。ああ、ひまわり。この二人には内緒にしていたのにくく。

「ひまわりちゃん。2人って一緒にお風呂に入ってるの？」

菜摘がこそそとひまわりに聞いた。でも、その声、こそこそしたって私に筒抜けなんだけどな。

「結婚してからずうっと、毎日一緒に入ってるよ」

またひまわりは、しれっとした顔でばらしてくれた。

「きゃくく。一緒にお風呂！それは基樹ともしたことないなあ」

蘭が顔を赤くしてそう言った。

「え？蘭、してみたいの？」

菜摘はちよつと青ざめて、蘭に聞いた。

「菜摘は葉君と、一緒に入りたくないの？」

逆に蘭がそう菜摘に聞いた。

「わ、私は」

菜摘は思い切り戸惑っている。

「まあ、お兄ちゃんとお姉ちゃん夫婦なんだから、一緒にお風呂もありだよ、全然」

ひまわりは、大人ぶってそんなことを言いだした。

チョコレートも仕上がり、キッチンをきれいに片づけて、リビングに行き、私たちはまたガールズトークに盛り上がった。

「最近よく家に、ひまわりちゃんの彼、来るんだって？」

菜摘が聞いた。

「兄貴が言ってたよ。けっこう気のいいやつなんだよって」

「うん。かんちゃん、お兄ちゃんのことすごく気に入って、それでよくうちにもやってくるの」

「え？じゃ、兄貴に会いに来てるの？」

「そうだよ。じゃなかったら、来ないよ」

「え？ひまわりちゃんに会いには？」

「え〜。だって、ほとんど毎日バイトで顔合わせてるんだよ？」

ひまわりがそう言うのと、

「デートはしないの？」

と蘭が聞いた。

「してるよ。バイトのお休みも、同じ曜日にしてるもん」

「ひまわりちゃんも仲いいんだ」

菜摘がそう言った。

「う〜。でも最近ちょっと」

ひまわりが言葉を濁した。そうなんだよ。ひまわりは最近、悩んでるんだよね。

「どうしたの？」

蘭が心配そうに聞いた。

「…クリスマスイブにかんちゃんと、初めてキスをしたの」
「うんうん」

蘭も菜摘も目を輝かせた。おいおい…。

「それから、よくキスをしてくるようになって」

「うんうん」

「それで、バレンタインに、私のことが欲しいって言い出したんだよね」

「え?!」

蘭も菜摘もいきなり、赤くなった。

「ひまわりちゃん、高校1年だよね?それはちよっと、早いんじゃない?」

菜摘がそう言った。

「でもさあ、付き合ってもう長いよね。じゃ、そろそろ彼氏のほうもしびれ切らす時期だよね」

そう言ったのは蘭だ。

「桃子はどう思う?」

2人に同時に聞かれてしまった。

「私?」

う。なんて言っているものやら。私もさすがに高校1年じゃ早いよって言ったけど、高校3年で妊娠したり、結婚までしちゃったお姉ちゃんに言われたくないと、ひまわりについてこの前言われたばかりだ。

「お兄ちゃんにも相談したの」

「え? 聖君にも聞いちゃったの?」

それ、初耳。聖君、何も言っていなかったよ?

「兄貴、なんだって?」

菜摘が聞いた。

「：まだ、早すぎる。もっと、じらしてあげなさいって言われた」
「なんだ、そりゃあ。よく言うよ。桃子にさっさと手を出したくせして」

菜摘がそう言って、呆れたって顔をした。

「だけど、それもいいかも」

蘭が真面目な顔をしてそう言いだした。

「え？どうして？」

ひまわりが聞いた。

「ちゃんとひまわりちゃんのことを大事に思ってるかどうか、わかるじゃん？大事にしてくれる人と結ばれたほうが絶対にいいよ」

蘭、なんだか説得力ありありなんですけど。

「基樹、大事にしてくれてるもん。やっぱり、元彼とは全然違うって思うんだよね」

「へえ。そうなんだ。基樹君、大事にしてくれてるんだ」

菜摘がそう言った。

「それに、蘭にメロメロなんだってね？」

私がそう言っていると蘭が、

「それも、聖君が言ってたの？」

と真っ赤になって聞いてきた。

「うん」

「もうー。聖君め。今度会ったらとっちめる！」

と、とっちめる？ってどうやって？

菜摘と蘭はチョコを持って帰って行った。

「明日かんちゃんに渡すの？」

ひまわりに聞くと、

「うん。バイトの帰りに渡す予定」

とひまわりは言った。それから、顔をこわばらせ、

「私のことは、プレゼントできなくて、ごめんって言うつもりなんだけど、かんちゃん、じゃあ別れようとか言ったりしないかなあ」と聞いてきた。

「それで別れるような男なら、別れたほうがいいと思うけど」

「あ、お兄ちゃんと一緒のこと言ってる」

「聖君もそう言ってた?」

「うん」

そうか。

「でもかんちゃんなら、大丈夫だよって、お兄ちゃんは言ってたけど」

「…そうなの?」

「うん」

私はあまり、かんちゃんと話したことがないから、今いち性格とかつかめてないけど、聖君はかんちゃんの性格もわかってるみたいだし、聖君がそう言うなら間違いないかなあ。

私はというと、今日さっそく聖君が帰ってきたら、チョコをあげるつもりだ。今年も多めに作ったから、明日れいんどろっぷすにも持って行ってもらおう。

聖君。私のことはプレゼントできなくて、ごめんなさい。と謝って、チョコだけをあげようかな。私も。

なんて思っていたのに、聖君は帰ってくるなり、

「あ。すげえチョコの匂い。今日作ってたんでしょ?どこ?」と突然聞いてきた。

どこって、あのね。そんな簡単に催促されても…。

するとひまわりが、聖君ようにラッピングしたものを先に、
「はい！私から」

と言って、渡してしまった。

「え？ひまわりちゃんの手作り？」

「うん」

「すげえ。俺、もらってもいいの？」

「うん」

「サンキュー。ひまわりちゃん」

聖君、それ、最高の笑顔じゃない？ひどい。私がチョコをあげて、その笑顔でサンキューと言ってもらうつもりだったのに！

なんか悔しいかも。

「桃子ちゃんのは？」

「あげない」

「え？」

聖君が青ざめた。

「だって、ひまわりからので十分でしょ？」

そう意地悪も言ってみた。

「え？じゅ、十分って？」

「：まだバレンタインデーじゃないもん。明日あげる」

「あ、そっか」

聖君がほっとしていた。

本当はバレンタインの前日でも、今日あげるつもりだったのにな。

「じゃ、お風呂に入りに行こうよ。桃子ちゃん」

なんだか、悔しいし、断っちゃおうかな。

「俺、先に入ってるよ」

聖君はさっさとお風呂に行ってしまった。

バカ。あほ。そりゃね、ひまわりが作ったチョコを、無愛想に受け取ったりしたら、それもそれで怒っちゃうと思うけど、あんなに喜んで受け取らなくなたっていいじゃん。それも、最上級の笑顔で…。なんか、やっぱり悔しいかも。

お風呂に入っても、何も言わずに私はふくれていた。でも、まったく気がつかない様子。

「背中から洗っちゃうね？」

と言って、私の体を洗い出してる。

それから聖君は私の前に立って、お腹を洗い出そうとして、

「うわ。これ、風の足？」

と私のお腹を触ってきた。

「え？ うん。風の足の裏だ…」

私のお腹に風の足の裏が、ぼこってでっばっているのが見えた。

どうりでお腹が痛かったわけだ。今、お腹の中で足をのぼしてるんだな…。

「固い。風の足の裏」

「うん」

「すげ〜。風の足だ〜」

聖君が目を輝かせて見ている。

「おへそ」

「へ？」

「私のおへそ、なくなっちゃった」

「あ、そうだね。おへそってやっぱり、ただへっこんでるだけなんだねえ。お腹が大きくなると、おへそ消えちゃうんだねえ…」

聖君はそう言った後に、今度は風の足の裏をつついた。

「これ、つつかれてるのって、風もわかるかな」

「さあ？」

「風〜。パパでちゅ〜」

お腹に今度は話しかけた。ああ、もう。風に夢中になっちゃったよ。嬉しいって言えば、嬉しいけど、きっと生まれてきたらこんなもんじゃないよね。私、ほっておかれちゃうんじゃないかな。ちょこつと不安だな。

「お腹、痛くない？」

「時々痛いよ。風が動くとき」

「…お腹、重くない？」

「重いよ」

「……」

聖君が優しい目で私を見た。そしてすごく優しく、チュッてキスをした。

「…聖君」

「ん？」

聖君は優しく、私のお腹を洗い出した。

「ごめんね」

「え？何が？」

いきなり謝られて、聖君は驚いている。

「バレンタインだけど、チョコしかあげられない」

「へ？ど、どういふこと？」

「私はプレゼントできなくて…」

「…あ。そういうことか」

聖君はようやく理解できたって顔をして、

「いいよ。桃子ちゃんが作ってくれたチョコだけで、もう十分」

聖君はそう言うのと、私の鼻の頭にキスをした。それからほっぺにも、おでこにも。

「くす。桃子ちゃん、そんなこと思ってたの？」

「うん」

「可愛いよね。本当にさ」

聖君にぐにゅって鼻をつままれた。

「体冷えちゃうね。さっさと洗わないとね」

聖君はそう言って私の体を洗うと、あったかいシャワーで流し、髪も洗ってくれた。

私はよっころしょとバスタブに入った。そして鼻歌を歌いながら体を洗っている聖君を見た。

ちょこつと夏よりも、日に焼けた肌の色が薄くなったような気がするけど、聖君は冬でも肌が真っ白になることはない。

それから、背中も肩も胸も、またたくましくなったかもしれない。

たまの土曜日、聖君にくつついてお店に行くことがある。そこで紗枝ちゃんがいると、いろいろと教えてくれる。

今、毎日のように来ている近所のコンビニでバイトしてる子は、絶対に聖君目当てだとか、だけどきつと、聖君が結婚してることも知らないでいるよとか。

クリスマスもプレゼントを、聖君はもらっていたらしい。明日のバレンタインも絶対にチョコを持って来る子がいるんだろうな。

聖君は最近、バシって断らず、やんわりと断っているってそう紗枝ちゃん言ってたっけ。でも、しっかりと直接告白してくる子には、「俺、結婚してるし、春に子供も生まれるんだ。悪いけど、気持ち

には答えられない」

とズバッと言っちゃってるらしい。

「え？結婚？こ、子供が生まれる？」

とたいていの子は困惑して、ごめんなさいと謝って、とっとと店を出て行くらしいけど、たま〜に、

「それでもいいです。会いに来てもいいですか？」

とあきらめの悪い子もいるようで。それでも聖君は、

「ごめん。会いに来られても、どうしてあげることもできないから」と頭を下げているって、紗枝ちゃんが教えてくれた。

「聖君」

「ん？」

聖君は髪も体も洗い終え、私のほうを向いた。水が髪から滴り落ちた。聖君は前髪を手であげると、もう一回私に、

「なに？お腹張っちゃった？」

と聞いてきた。

「ううん。今日もかっこいいなあって思ってた」

「え〜？見惚れてたの？」

「うん」

「まったく。お風呂で俺に見惚れてたら絶対に、のぼせちゃうよ。

桃子ちゃん、もうお風呂から出る？」

「うん」

聖君は私がお風呂から出るのをいつも、背中を支えたり腰を支えてくれて、サポートしてくれる。

そして私がお風呂から無事に出ると、聖君はバスタブにつかる。

洗面所で体を拭いていると、聖君の鼻歌がよく聞こえてくる。今日もご機嫌なんだなあ。

ぐにゅ。あ。お腹の凧も元気に動き出した。きつと凧も、ご機嫌なんだなあ。

もう9か月になった。来月には凧が生まれるんだ。

ベッドに寝るのもやつとこだし、寝返りもうてないくらいだ。夜中には必ず、トイレに行きたくなって起きてしまう。

聖君はそんな私を見ていて、優しくキスをしてくれることはあるが、それ以上は何も求めなくなった。それどころか、起き上がるのを手伝ってくれたり、たまに腰が痛いときすすってくれたりしている。

足の先がまったく見えず、足の爪は聖君が切ってくれている。ついでになぜか、手の爪まで切ってくれる。

そして夜、寝る時には聖君は私のお腹に顔を当て、凧に話しかける。それもすくすく優しく。

そんなだから、私は凧にやきもちを妬いちゃうんだよね。だけど、そんな優しい聖君も大好きなんだけど。

「いよいよ来月か」

聖君はぼそりと、凧に日記を書きながらそう言った。

チュ。聖君の横顔がいきなり愛しくなり、ほっぺにキスをした。

「…桃子ちゃん」

「え？」

「凧が生まれて落ち着いたらね」

「え？」

「それまで我慢ね？」

「へ？」

何が？

「俺、いっぱいまた、愛しちゃうから」

え？あ、そういうこと？

「今は、俺に抱かれたくなっちゃっても、ちよつと我慢してね？俺も我慢するから」

「…」

もう。そんなこと言つて。私は別に…。別に…。

ムギユ。聖君の腕にしがみついた。うゝゝ。やっぱり、寂しがってるのは私のほうか。

「聖君」

「ん？」

「明日、チョコあげるからね？」

「うん。楽しみにしてるよ」

聖君は私の髪にチュってキスをして、そつと私を抱きしめた。

聖君の匂いに包まれた。ああ、これ。やっぱり落ち着くの。しばらく私はその聖君の優しいオーラに包まれていたくつて、聖君にべったりとくつついていた。まる。

2月〇日 臨月

もうすぐ卒業式だ。3年生はもう、ほとんど学校にも出ていない。
「ひっひっふっ」

私はたまに、聖君とラマーズ法を家で練習している。大学も春休みだから、聖君がバイトに出る時間までは、2人で過ごせるのが嬉しい。

「聖君。ちょっとトイレに行ってくる」
「え？また？」

すたこら。大きなお腹を支えながらトイレに入った。
そうなんだよね。なんだかお腹のふくらみが下に来てて、多分、膀胱を圧迫してトイレが近いと思うんだよね。

「ふっ」
ほんと、お腹が重くて歩くのも大変…。

私がよたよたとリビングに戻ると、チャイムが鳴った。

「こんにちは」
エステのお客様が来た。

「あ、いらっしゃい。どうぞ、どうぞ」
母が和室に案内した。

「桃子ちゃん、お腹、大きくなったわね。もう臨月？」

「はい。10か月に入りました」

「楽しみねえ。あら。今日は旦那さんもいるの？」

「大学、もう春休みなんです。あとでコーヒーでも入れましょうか？」

「まあ、ありがとう。おほほほ」

聖君は、エステのお客様にも大人気。たまに休みで家にいる時、聖君はコーヒーを入れてあげたりしている。それも、ちゃんと豆から挽いた本格的なのを。

「は〜〜」

息を吐きながら、ソファーに座った。

「大丈夫？」

「うん。でも、卒業式出れるかな」

「：無理はしないんだよ？」

「うん」

だけど、出たい。ちゃんと卒業式で卒業証書をもraitたいよ。

「そういえば、小百合ちゃんはどうしてるの？」

コーヒー豆を挽きながら、聖君は聞いてきた。

「メールが来たけど、まだまだ生まれそうもないって。でも、私と同じで、お腹大きくて大変みたい」

「そうなんだ。卒業式は？」

「うん。出れるって」

「そっか。よかったね」

「うん」

「桃子ちゃんも何か飲む？」

「トイレにまた行きたくなるからいい」

本当に大変だ。妊婦って。最近腰も痛い時があるし、寝てて足がつった時もあった。あの時は聖君が優しく、足をさすってくれたっけ。

私、絶対に聖君がそばにいてくれなかったら、乗り越えられなかったんじゃないかなって思っちゃうよ。

お腹がここまで大きいと、車に乗るのも大変で、しばらく、れいんどろっぷすにも行っていない。クリスマスの日以来、桐太にも会っていないし、麦さんは一回お店の手伝いに来てて会ったけど、それっきりだな。

検診の日には、聖君はいつもついてきてくれている。エコーで見る風の写真は、もう骨格もしっかりあって、聖君はそれを見て感動していた。

そして、聖君は必ずその写真を、れいんどろっぷすに持って行く。杏樹ちゃんも、聖君のご両親も、すごく喜んで見ているらしい。

「風、どっちなかな」

「うーん。男の子か、女の子か、わかんないみたいだね」
エコーで見ても、わかっていない。

「生まれてからの、お楽しみだね」

「うん」

「あー。もうすぐ会えるね！風」

聖君が私のお腹に顔を近づけ、そう言った。

聖君は大学が休みになってから、ほとんどバイトの時間までうちにいることが多い。友達とどこかに行くとか、買い物に行くとかすればいいのになって思うんだけど、一時でも離れるのが嫌みたいだ。私とではなくて、風と…。

あー。生まれたら、どんなになっちゃうのかな。もし女の子だったら、完全に私をそっちのけにして、風ばかりをかわいがりそう
だ。

風への日記は3冊。ほとんど毎日のように聖君は、早く風に会いたいよって書いてある。

生まれたら、海に行こう。水族館に行こう。動物園に行こう。い

つか、海に潜りに行こう。

そんなことがいっぱい、書いてある。

最初の頃は、パパはママと仲良しなんだとか、今日もデートをしたよとか、そんな内容だった。でも、いつごろからかな。風に当たった、ラブレターのようになっちゃっている。

う。ちよっと妬ける。私なんて、最近、メールもくれなくなったのに。

あ、そんなこともないか。バイトに行つてると、帰る前に、

>これから帰るね。桃子ちゃん、体の具合は大丈夫？

というメールを毎日のようにくれてたっけ。でも、それだけで、特にラブラブなメールってわけじゃないし。

私はたまに、ハートをつけてみたり、たま〜にだけど、会いたいか、早く帰って来てねとか、寂しいとか、メールをするんだけど、聖君、仕事終わるまでメールしてくれないし、来ても、

>早めに帰るね。

だけなんだもん。

もしかして、前に蘭と菜摘が言ってた、倦怠期っていうやつかしら。

お風呂に入っても、聖君はお腹に触って風に話しかけてばかりいる。

私って、もうあきらまれちゃってるの？

し〜し〜ん。お風呂から出て、部屋に行き、私は黙ってベッドに座っていた。聖君はるるるんで、風に日記を書いている。

私が、暗いのに気づいてくれない。お風呂でも、私、ほとんど話さなかったのにな。

「桃子ちゃん」

「…え？」

「父さんと母さんが、会いたがってたよ」

「…そう」

「杏樹も、いろいろと桃子ちゃんと話がしたいとか、ひまわりちゃんにも会いたがってた」

「ひまわりとも、杏樹ちゃん、全然会ってないもんね」

「生まれる前に、こっちに遊びに来たいって言ってたけど」

「杏樹ちゃんが？」

「母さんも父さんも」

「…うん。いいよ。お母さんもひまわりも喜ぶんじゃないかな」

「桃子ちゃんは？」

「私？うん。もちろん、嬉しいけど」

「そう？」

聖君はちらっと私を見ると、また風日記を書きだした。そんなに、いったい何を書くことがあるんだろうって、のぞいてみたら、イラストを描いているようだった。

「そう言えば、今日の歌番組見た？」

「見たよ。花ちゃんから、メール来たもん」

「藤也、とうとうテレビに出だしたね」

「うん」

「テレビで見ると、ちょっと雰囲気変わるね」

「すごくかっこよかった」

「え？」

「藤也君、かっこよかったよね」

「…」

聖君は顔をあげ、私をじっと見ている。

「な、なあに？」

「藤也にまさか、惚れた？」

「え？私が？まさか」

「だよ。ちよっと今、びびった」

えゝゝ？なんで？

「桃子ちゃんが俺以外の男、褒めたことってないし」

えゝゝ？そうだったっけ？

「私、藤也君もだけど、桐太もかっこいいと思うし、基樹君や、葉君だって、素敵な人たちだなって思ってるよ」

「ふ、ふうん」

聖君はちよっと引きつって笑ってから、また日記に絵を描きだした。

「それに、先生も」

「先生って？」

「新任の先生。前の体育の先生がいきなり、田舎に帰っちゃって、新しく入ってきた先生がいるの」

「男？」

聖君が顔をあげた。

「うん。若い先生。確か24だったけな」

「…か、かっこいいやつなの？」

「うん。すごくモテてる」

「桃子ちゃんもかっこいいって思うの？」

ううん。聖君のほうが全然かっこいい。っていつもなら言ってる

けど、最近、風にしか興味を持ってくれないし、ちょこつと意地悪してもいいかな。

「かっこいいって思うよ」

「……………」

聖君がペンを置いて、私の隣に座ってきた。

「えっと。一応言っておくけど、桃子ちゃんは人妻なんだからね？」

「うん。それが？」

「それがって、だから、そんな若い男の先生が来たって、かっこいいなんて思ってたら駄目なんだからね？」

「なんで？」

「……………も、桃子ちゃん？」

聖君の顔が引きつってる。

「それにね、優しかったよ。体育の時間に小百合ちゃんと見学したら、椅子やひざ掛けを持ってきてくれたんだ」

「え？」

「体育館は冷えるから、お腹冷やさないようにって」

「……………」

「それにね、体育履きのひもがほどけちゃって、それを結びなおしてくれたんだよね。なかなか、そんなことまでしてくれないよね？」

「え？」

聖君、顔、青くなった。

「…そんなことまで、してくれるの？」

「うん。だって、絶対にしゃがめないし、靴ひもなんて一人で結べないし」

「…だよ。そりゃそうだ。うん」

聖君はそう言うてから、下を向いた。

「：それで、桃子ちゃん、優しいって喜んだの？」

聖君の声、ちょっと怖いかも。

「小百合ちゃんと、優しい先生だねって言ってたけど」

「そ、そうなんだ。小百合ちゃんまでが」

「うん」

「……」

聖君はしばらく黙り込んだ。

それから、おもむろに私を見ると、

「浮気は絶対に、駄目だからね！桃子ちゃん」とすごく真剣な目で訴えてきた。

「浮気？」

何言ってるの？かっこいいって言っただけじゃん。

「っていうか、っていうかさ。え？なんで？いつもなら、聖君しかかっこいい人なんていないとか、聖君だけだからね、とか、言うてるよね？なんでその先生のことは、そんなに褒めるわけ？」

「：」

ありゃ、怒りだしちゃった。ちよつと言い過ぎたかな。

「まさか、そいつに惚れたわけじゃ」

「違うよ。そんなじゃないから」

「そ、そんなじゃなかったら、どんな？」

「……だから、えつと」

困ったぞ。

「なに？なんで口ごもってるの？なんで？」

「だから、えつと」

「…まさか、まじで、その先生に」

「もう～～～！惚れるわけないじゃん。聖君だけだよ～～」

「…」

聖君が疑いの目で見た。

「本当に聖君だけだってば。聖君よりかっこいい人なんているわけないし」

「…本当に？」

ギュム。聖君の腕にひつついた。

「聖君、最近、風のことばかりで、私のことほっておくから、意地悪したくなっただけだもん」

「え?!」

「寂しかったただけだもん」

「…」

聖君が目を丸くした。それから、にへら～～～って笑って、

「桃子ちゃん。かわいすぎ～～！」

と、私の髪に頬づりをして、おでこにチュってキスをした。

「もう、風にまでやきもち妬いちゃうなんて、どんだけ、俺に惚れてるんだよ～～」

聖君はそう言って、まだにやついている。

なんだ。寂しい思いさせてごめんね、とか、これからは、もっと桃子ちゃんのことを見るようにする、とか、そういうセリフを期待したのに。

ムス…。

「あれ？なんで怒ってるの？」

「別に」

「…まだ、風に嫉妬してるの？」

「別に」

「…桃子ちゃん？」

プイ。聖君と逆の方に向いた。

「あれ？怒ってるよね？」

「べっっつっくに」

「桃子ちゅわん」

聖君が後ろからそっと抱きしめてきた。

「愛してるよ」

「…」

「世界一愛してるから」

「…」

「だから、機嫌治して？」

「…」

「桃子ちゃんってば」

「…」

まだ黙って、そっぱを向いていると、聖君は私の顔を覗き込み、キスをしてきた。

「…」

うわ。長いキスだ。やばい。とろける。

「…機嫌治った？」

「もう…」

私は聖君の胸を手で軽く押して、怒ったふりをした。

でも、顔が赤くなって、聖君には怒ってるふりをしてるのを見破られた。

チュ。また軽く聖君はキスをしてきて、

「愛してるよ」

ともう一回言った。

「私も…」

聖君の胸に顔をうずめた。

「桃子ちゃん。俺以外の男のこと、かつこいいなんてもう言わないでね？」

「妬けた？」

「思い切り」

聖君がそう言ってくれて、私は嬉しくなった。

聖君。私はなんだか、結婚してからどんどんわがままになってるのかもね。甘えん坊だし、聖君がそばにいてくれないと、寂しいし。

「聖君」

「ん？」

「大好き」

「俺も大好きだよ」

「聖君。愛してる」

「…うん。俺も愛してるよ」

ああ、聖君の胸、安心できる。

聖君にそっと抱きしめられ、私は夢心地になっていた。

もう臨月。いつ生まれてもいいような状態だ。でもまだまだ、私は風を産む心の準備ができてなくて、新婚気分を味わっていた。もうすぐ高校も卒業するのに、学生気分も全然抜けそうもない。こんなで、母親になれるんだろうか。

そして、2月もそろそろおしまいだ。3月に入ったら、すぐに卒業式だ。

学校とも、お別れなんだ。悲しいな。

いろんな思い出がいきなり、走馬灯のように私の頭をよぎっていった。

聖君と出会った、高校1年の夏。それから、私の高校生活は、聖君との思い出がいっぱいつまっている。

それに、蘭や菜摘。そして妊娠しているとわかってから、いろいろと応援してくれたり、サポートしてくれたクラスメイト達。

もうすぐお別れなんだ。

しみみり。聖君は私の心の中を察したかのように、優しく髪をなでてくれる。

「聖君」

「ん？」

「卒業さみしいな」

「うん」

「でも、ちゃんと卒業できるのは、聖君のおかげだね」

「俺の？違うよ。桃子ちゃんの頑張りでしょ？」

「ううん。聖君、それに先生やクラスメイト達のおかげ」

「……みんな、応援してくれたんだもんね？」

「うん」

いろいろとあったけど、いつの間にか友達が増えていって、高校3年は、貴重な1年になったな。

「卒業式、泣きそうだね？桃子ちゃん」

「うん」

「俺、ハンドタオルたくさん持って行ってあげるよ」
「え？」

「はは。なんてね」

聖君は可愛い笑顔でそう笑って、また私のおでこに優しくキスをした。

「ありがとう」

聖君の笑顔を見たら、なんだか寂しいのも消えちゃった。

聖君。卒業式見ててね。そこでいろんなことから卒業して、これからは母親になるっていう自覚、ちゃんと持つからね。

聖君の奥さんなんだっていう自覚もしっかりと、持っていくからね。

そんな決心を心の中で、私はしていたのであった。まる。

3月1日 卒業前夜

いよいよ明日だ。高校を卒業するんだ。

明日制服は着られない。マタニティのジャンパースカートで行く。制服を着れないのはちょっと寂しい。でも、卒業式に出られるんだもん。それだけでも、嬉しいよね。

蘭や菜摘と卒業できるのがすごく嬉しい。

3年どころか、中学も合わせたら、あの校舎に私は6年間も通っていたんだな。長かったな。

聖君がバイトから帰ってくるまで、私は部屋でアルバムを見ていた。高校の入学式。2年の修学旅行。みんなで海に行った時の写真。懐かしいな。

修学旅行は、花ちゃんとヒガちゃんと、3人で行動していたっけ。あ、思い出した。お土産屋で、実はナンパされたんだよね。聖君には言っていない。

3人で困っていると、そこにたまたま蘭が通りかかって、助けてくれたんだった。

そんなことも、あったっけなあ…。

チャイムが鳴った。あ、聖君だ。今から一階に下りて行ったら、時間かかったちゃうし、ここで聖君が来るのを待っていいのかな。

しばらくすると、トントンと階段を上る聖君の足音が聞こえた。

「桃子ちゃん？」

聖君が心配そうにドアを開けた。

「おかえりなさい」

「あれ？なんだ。びっくりした」
「え？」

「リビングにいないから、お腹でも痛くなって休んでるのかと思った」

「ううん。思い出に今、浸っていたところ」

「明日卒業だから？」

「うん」

「写真見てたの？俺も見えていい？」

「うん」

聖君は私の横に座ると、アルバムをめくりだした。

「これ、入学式？」

「うん」

「わお。桃子ちゃん、初々しい！なんだか、制服がでかいね」

「まだその頃、私背も小さかったし」

「そうだよね。俺が会ってから桃子ちゃん、背、伸びたもんね」

「うん」

「ふ：。ポニーテールは変わらないね。でも、やっぱり幼いね」

「そう？」

「：俺が会った時もまだ、あどけなさが残ってたよね」

「そうだった？」

「うん」

聖君は口元をゆるませながら、アルバムをめくった。

「あ、これ。みんなで海に行った時の写真だ」

「うん」

「ほら、まだまだ幼さがあるよ」

「聖君とは、離れて写ってるね」

「：そうだね。って、俺、すっかり菜摘の横をキープしてんじゃん」
「本当だ」

この頃、聖君は菜摘のことが好きだったんだっけ。

「あ、花火大会。浴衣姿、可愛い、桃子ちゃん」

「えゝ。そうかな、まるで小学生みたい」

「あはは。自分で言っちゃう？」

聖君が笑った。あれ？そこでフォローはないわけ？やっぱり、小学生みたいって、聖君も思ってた？

聖君はぺらぺらとアルバムをめくり、聖君の家にひまわりと泊まった時の写真で手が止まった。

「楽しかったな。この時」

私はその時のことを思い出して、そう言った。

「桃子ちゃんのパジャマ姿が、可愛かったんだ」

「え？」

「母さんが作ったパジャマ。可愛かったな、あれ」

「：子供みたいで？」

「また、そういうことを自分で言う。子供じゃないよ？全然」
「そっかな」

「桃子ちゃん、自分のことわかってないよね」

「え？」

「そりゃ、大人っぽさはないけど、桃子ちゃんの可愛らしさは、子供っぽいとか、幼いとか、そういう可愛らしさじゃないんだ」

「じゃ、どういう可愛らしさ？」

「：」

聖君、黙っちゃった。

「あ、わかった。また犬みたいとか言うんでしょ？」

聖君が私のおでこに、おでこをくつつけた。

「可愛いって言ったら、可愛いの」

それから、チュってキスをしてきた。

「桃子ちゃん、お風呂入っちゃった？」

「ううん。まだ」

「じゃ、入りに行こうよ」

「うん」

アルバムを片づけ、私は聖君と一階に下りた。聖君は私が階段を下りる時、優しく手を引いてくれる。

お風呂に入った。裸になってみると、お腹のふくらみが下がってきたのが、すぐよくわかる。

「もうすぐなのかな、生まれるの」

「お腹張ってる？」

「今は大丈夫だけど、今日、何回か張ったんだ」

「明日は、大丈夫そう？」

「うん」

「もし、お腹張ったり、痛くなったらすぐに言うんだよ？」

「うん」

ドキドキ。なんだか、ドキドキしてきちゃった。

風、お願い。卒業式には出させて。ううん。風も一緒に出ようよ。一緒に卒業しよう。

お風呂から出て、部屋に戻った。日記を書いて、聖君と、今日は早めに寝ようねって言って、ベッドに横になった。

「聖君」

「ん？」

「なんでもない」

「もしかして緊張してる？」

「わかるの？」

「わかるよ、そりゃ。毎日桃子ちゃんのこと、見てるんだから」

「…聖君は卒業式、緊張した？」

「ううん。全然。あ、でも、女の子に囲まれたら嫌だなんて、どうやって逃げようかってそんなことは考えてた」

「すごかったもんね。卒業式」

「桃子ちゃんと菜摘が来てくれてよかったよ。基樹も葉一も薄情なんだもん」

「聖君、今でもお店に聖君目当ての子、来るの？」

「ううん。たまうにね」

「バレンタイン、チョコレート、あんまりもらってこなかったよね」

「ああ、だって、母さんや父さんにあげちゃったから。それにバイトのみんなで分けちゃったし」

「じゃあ、いっぱいもらってたんだ。知らなかった。なにしろ、バレンタイン以降、お店行ってないんだもん。」

「結婚しても、モテちゃうんだね」

「でも、俺、桃子ちゃん一筋だよ？」

「風が女の子だったら？」

「風は娘じゃん。俺の奥さんは桃子ちゃんだけだよ？」

「そうだよ。もし風が女の子だったら、いつかお嫁に行く日が来るんだもんね」

「え？」

あ。聖君の顔が、顔面蒼白…。

「お、女の子かどうかもまだわかんないし、先のことを考えてもしようがないよね」

私は必死にそう言ったけど、まだ聖君は顔面蒼白。お嫁に行くつていうのが、そんなにシヨック？

「聖君。今は何よりも、無事に生まれてくることだけを思っていようよ」

「あ、うん。そうだね」

聖君はようやく我に返り、私のお腹をさすった。

「風。無事に元気に生まれてこいよ」

風はあまり動かない。先生の話によると、子宮が下がると、あまり子宮の中で動けなくなるそうだ。

この前、検診に行った時、心音はすぐく元気だったし、だから、元気は元気なんだよね？

だけど、ずっとグニグニ動いていたから、あまり動かないとつい、不安になっちゃうな。

「桃子ちゃん。寝ようか」

「うん。おやすみなさい。聖君」

「おやすみ、桃子ちゃん」

聖君はそっと優しくキスをして、しばらくすると、すうって寝息を立てた。

聖君の寝顔を見た。私は寝付くまで時間もかかるし、寝てもトイレにいきたくて起きたり、お腹が重くて、熟睡できなかったりしている。

風が生まれたら、この重さもなくなるんだ。だけど、いつも一心同体、どこに行くのも一緒だったから、離れるのはちょっと寂しい

な。

あ、だけど、生まれてからだって、一心同体みたいにな、いつでも抱っこしてることになるんだろうな。

風に買った肌着も、ベビー服ももう洗って、ちゃんと閉まってる。

それから、オムツや、哺乳瓶も買っておいである。
入院の準備はそろそろしないとな。

ベビーベッドも私たちのベッドの横においてあり、すでにそこには風のおもちやが取り付けてある。くるくる回って、音楽が流れたり、光ったりするものだ。

早くこれを見て、笑ったりしたらいいなあ。って、そんなこともまだまだ先の話だね。

そんなことを思いながら、私はベビーベッドを眺めた。

「すう…」

聖君の寝息。可愛いなあ。寝顔もなんて可愛いんだろう。

こんな静かな夜は、風が生まれたらもう、しばらくないんだろうなあ。

そっと聖君にキスをした。聖君の唇、あったかい。

お腹が大きくて、聖君の胸に抱かれて眠るわけにはいけなくなつた。ビトってくっつけないのが寂しいけど、生まれたらまた、引っ付いて寝れるようになるのかな。

その日、夢を見た。

ああ、風だ。ベビーベッドですやすや寝ている。それを私が見ていると、後ろから聖君が抱きしめてきた。

「桃子ちゃん」

聖君はキスをして、そして二人でベッドに寝転がった。

ギュウ。聖君が抱きしめてきた。私も聖君に思い切り抱きついた。私のお腹はもう、ぺたんこになっていて、いくらでも聖君と思いい切り抱きしめあえる。

聖君のぬくもり。ギュって力強く抱きしめてくれる腕。たくましい胸。全部が嬉しい。

そしてトイレに行きたくなって、目が覚めた。

隣には、背中を向けてしまった聖君が、すやすやと寝ている。

ははは。お腹大きくなるまでは、私のことを抱きしめながら寝てたのに。聖君の腕の重さを感じながら、寝てたのになあ。

早くまた、抱きしめてもらいたいな。ギュって。

なんて思いながらトイレから戻り、私はよっころしょと聖君の横に寝転がった。

あ。あれ？なんだか、お腹張ってない？

ドキドキ。明日、本当に大丈夫だよな？

それからしばらく、寝れなくて聖君の寝息を聞いていた。聖君の背中をさわったり、腕もさわってみた。ああ、腕の筋肉、またついてきたんじゃない？筋トレ頑張ってるのかなあ。

こんなにぴとぴとさわっても、聖君、良く寝てるなあ。

聖君の足に私の足をくつつけた。あったかい。私は寒がりだから、聖君と同じ布団はあったかくって、私の足は冷えることがない。

聖君の髪にもふれた。サラサラだ。

ははは。背を向けていても、聖君、愛しいなあ。背中も腕も、髪の毛も、全部、愛しいよ。

「聖君、大好き」

その日はやけに、聖君が愛しくて、なかなか眠ることができないでいた。

聖君のことを思うだけで、なんでこうも胸があったかくなるんだろう。

そして、聖君の寝息を聞きながら、私は眠りについた。

目が覚めた。聖君が優しく私を見ていた。

「おはよう。よく眠れた？」

「ううん。夜中起きちゃった」

「トイレ？」

「うん」

「お腹は？張ってない？」

「うん。今は大丈夫」

昨日の夜は張ってたけど、今はもう全然大丈夫だ。

「聖君の背中にふれたり、髪にふれてたの」

「え？」

「全然起きなかったね。聖君」

「もう、俺が寝てる時にさわってくるなんて、エッチ」

「なんでそうなるの？私はただ、聖君がすごく愛しくって…」

「もう……。桃子ちゃんってば！」

聖君はそっと私を抱きしめ、チュッとおでこにキスをした。

「さ、もう起きよう。卒業式だもんね」

「うん」

そうだ。これから卒業式だ。

一階に下りると、私たちの朝食が用意されていて、母はもう、化粧をしたり、支度にとりかかっていた。父も洗面所で顔を洗ったり

しているようだ。

「おはよう。聖君、桃子」

「おはようございます」

「どう？桃子。お腹は」

「うん。大丈夫だよ」

「そう。じゃ、食べて、支度しちやいなさいね」

「うん」

聖君といただきますと言って、朝ごはんを食べだした。

私は昨日よりも落ち着いていた。聖君もいつものごとく、美味しそうにご飯を食べている。

そして、私も聖君も着替えをして、それから母、父とともに、車に乗り込んだ。

ひまわりはもうすでに高校に行ってしまった。いつものごとく、ぎりぎりに起きてきて、バタバタと出かけて行った。

ひまわり。私の卒業式だっというのを忘れてるの？それとも、どうでもいいのかなあ。ちよつとさびしいな。

「さあ、出発するよ」

聖君がエンジンをかけた。ああ、みんなに会うのも久しぶりだなあ。

風、よかった。今日はお腹も張ってない。ありがとうね。ママが無事、卒業できるようにしてくれたのかもしれないね。

さあ、一緒に卒業式に出よう。

そして、これからは高校生の桃子じゃなくて、聖君の奥さんであり、風のお母さんになるんだね。

もうすぐ、私の妊婦時代も終わりを迎える…。

3月1日 卒業前夜（後書き）

妊婦日記も終わりです。短かったですが、読んでいただきありがとうございました。次作は、いよいよ風が誕生します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2342v/>

永遠のラブストーリー～妊婦日記編～

2011年8月19日18時23分発行